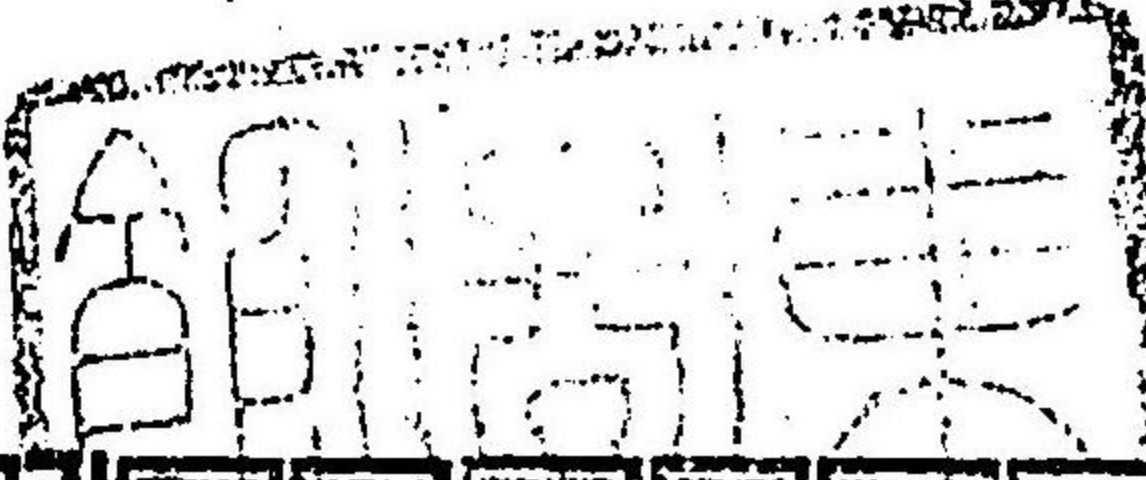


地理  
臺灣事情  
風俗  
附全島明細新圖





叙

連戰連捷の勢を以て清軍を撃破し四百餘洲を震慄せしめたる  
 我膺懲の師も媾和使の來朝と共に東洋の平和を克復し旭日旗  
 の指を處風靡せさるる武威泰西強國を壓す而して媾和無事  
 完結を遂げ台灣嶋は新に我占領地に歸し從來琉球國を以て南  
 端の關門ならしめしも今は遠く台灣島を以て我南門の鎖鑰と  
 するに至る臺灣島の樞要地たる形勢上論を俟たざる所なき加  
 ふるに島地物産品多く天然の産出に富るを以て工業上に於て  
 利を得る事夥しく商業上亦繁華たるの價值あるは夫れ論者  
 に問はとして燎々乎たり今本書は台灣の革沿革より地理學上



必要ある地勢山川都府灣港より人情風俗産物に至るまで詳細  
に説明し誰人の縦くに當つても容易に了解し得べき様容易懇  
切に綴文したるを以て一讀能く其事情を知るを得殊に商工業  
上の觀察に至つては斯道熟練家の事實談を載せ眞に外題に叛  
かざる台灣事情を詳細に記せる有益の書あり茲に出版の舉あ  
るに際し寒英君來りて稿を示し予に序を乞ふ乃ち愚意を陳じ  
て責を塞ぐ事然を

明治二十八年十月上浣

上原關洲誌



# 臺灣明細全圖

明治二十八年九月廿日印刷 全至十月 日發行

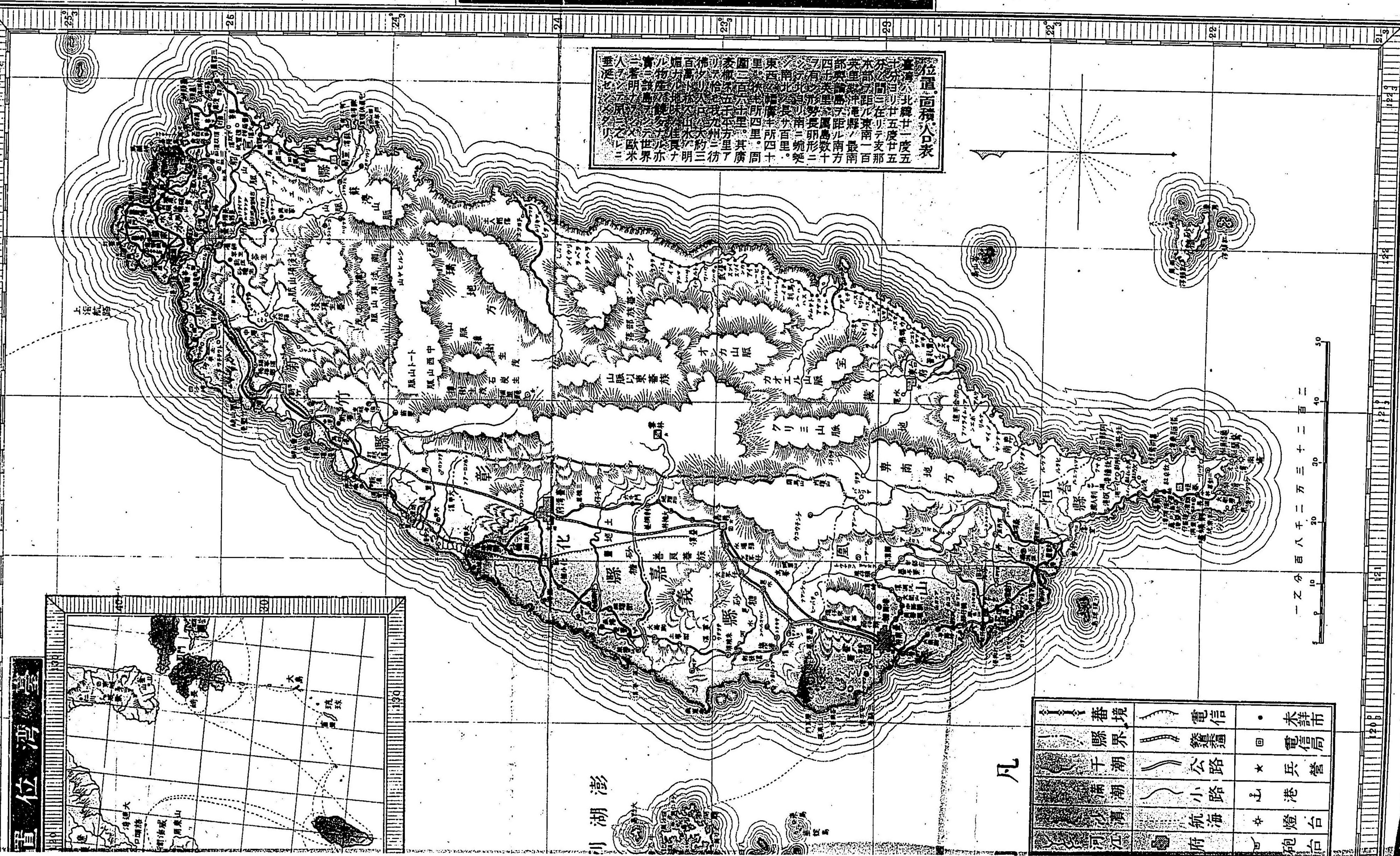
編輯者

東京市淺草區 淺草町十七番地

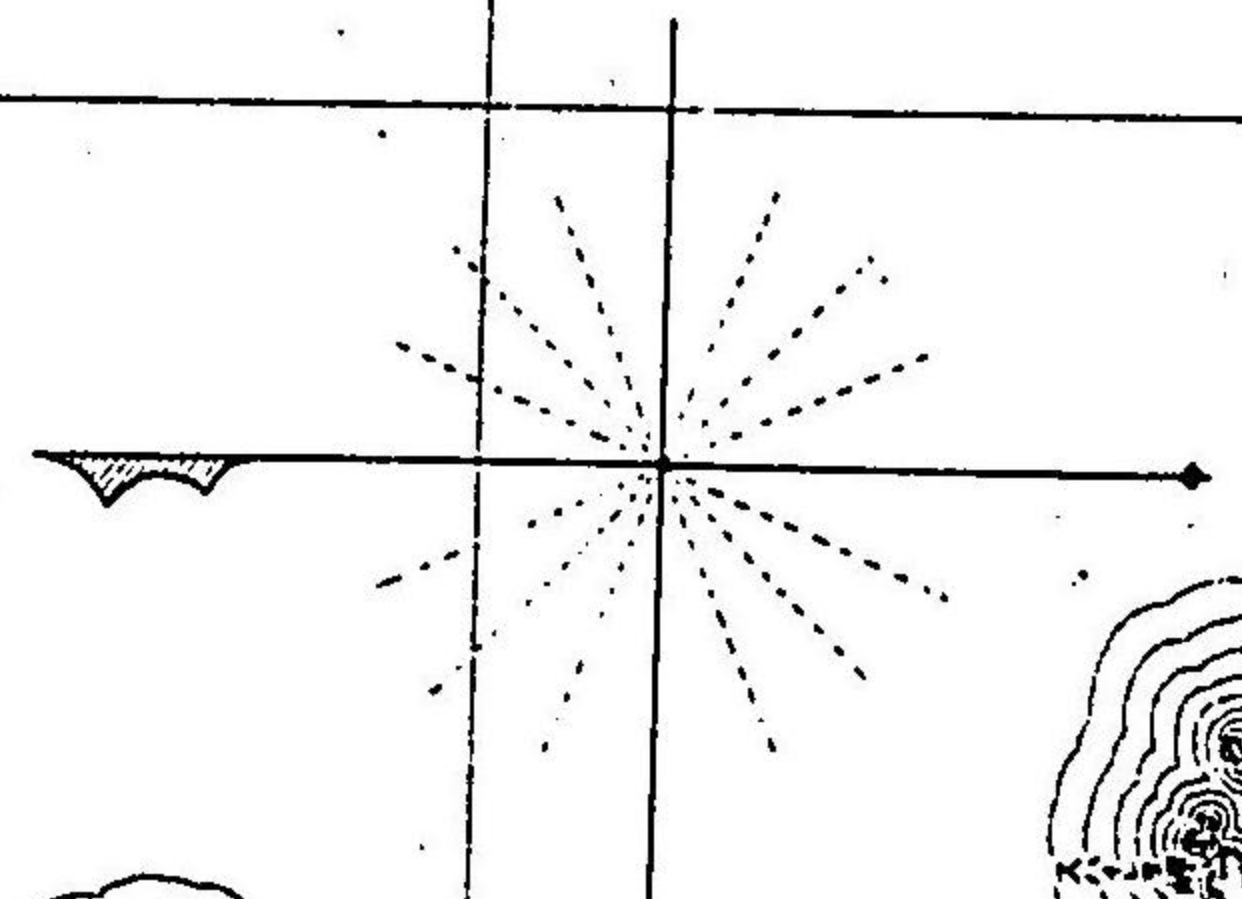
鈴木茂行

印刷兼發行所

東京市淺草區 浅草町十五番地

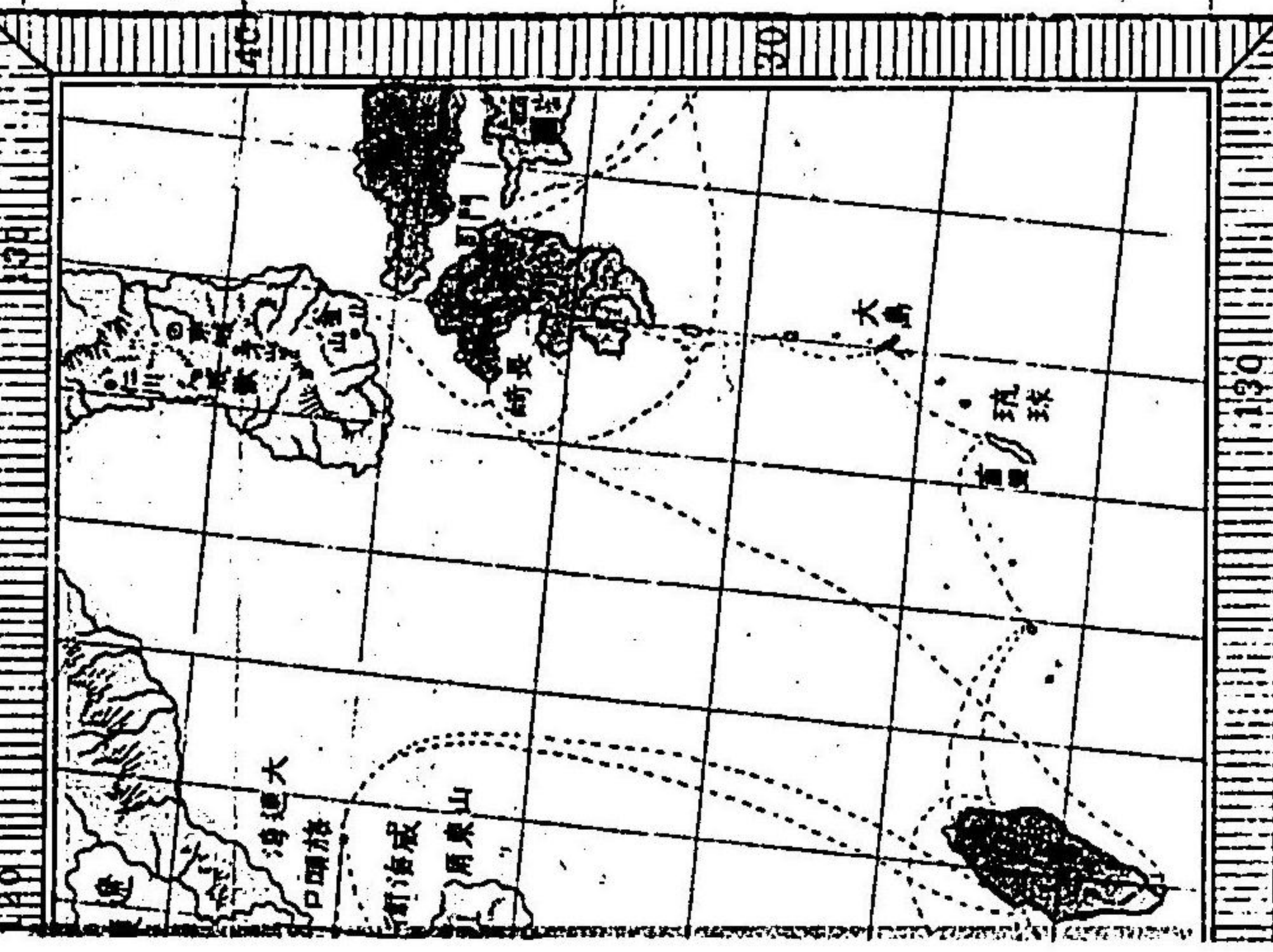


位置面積人口表  
 臺灣島南北長一百五十二里  
 東西寬九十二里  
 面積三萬六千三百七十九平方公里  
 人口二百一十二萬三千七百九十九人  
 一、基隆 二、台北 三、台中 四、台南 五、高雄  
 六、屏東 七、花蓮 八、台東 九、澎湖 十、金門  
 十一、馬祖 十二、釣魚臺



一之八千二百三十二百二  
 0 10 20 30 40 50

## 臺灣位置圖



—— 番境	—— 電信	● 未詳市
—— 縣界	—— 鐵路	○ 電信局
—— 干湖	—— 公路	★ 兵營
—— 滿湖	—— 小路	▲ 港
—— 沙洲	—— 航海	★ 燈台
—— 河	—— 府	▲ 砲台

澎湖

凡



年九月廿日印刷 全五十月 日發行

編輯者

東京市浅草区 浅草町十七番地

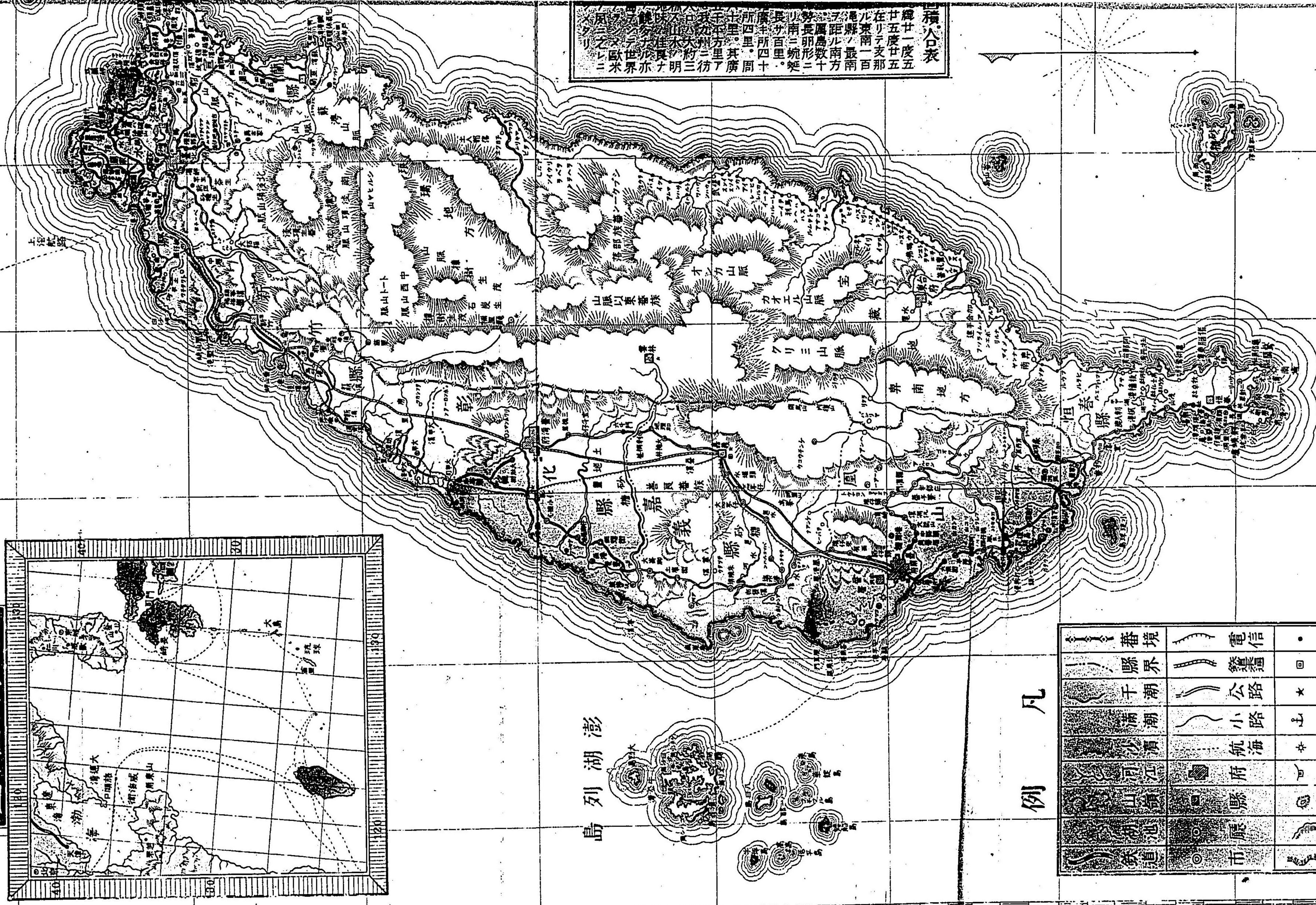
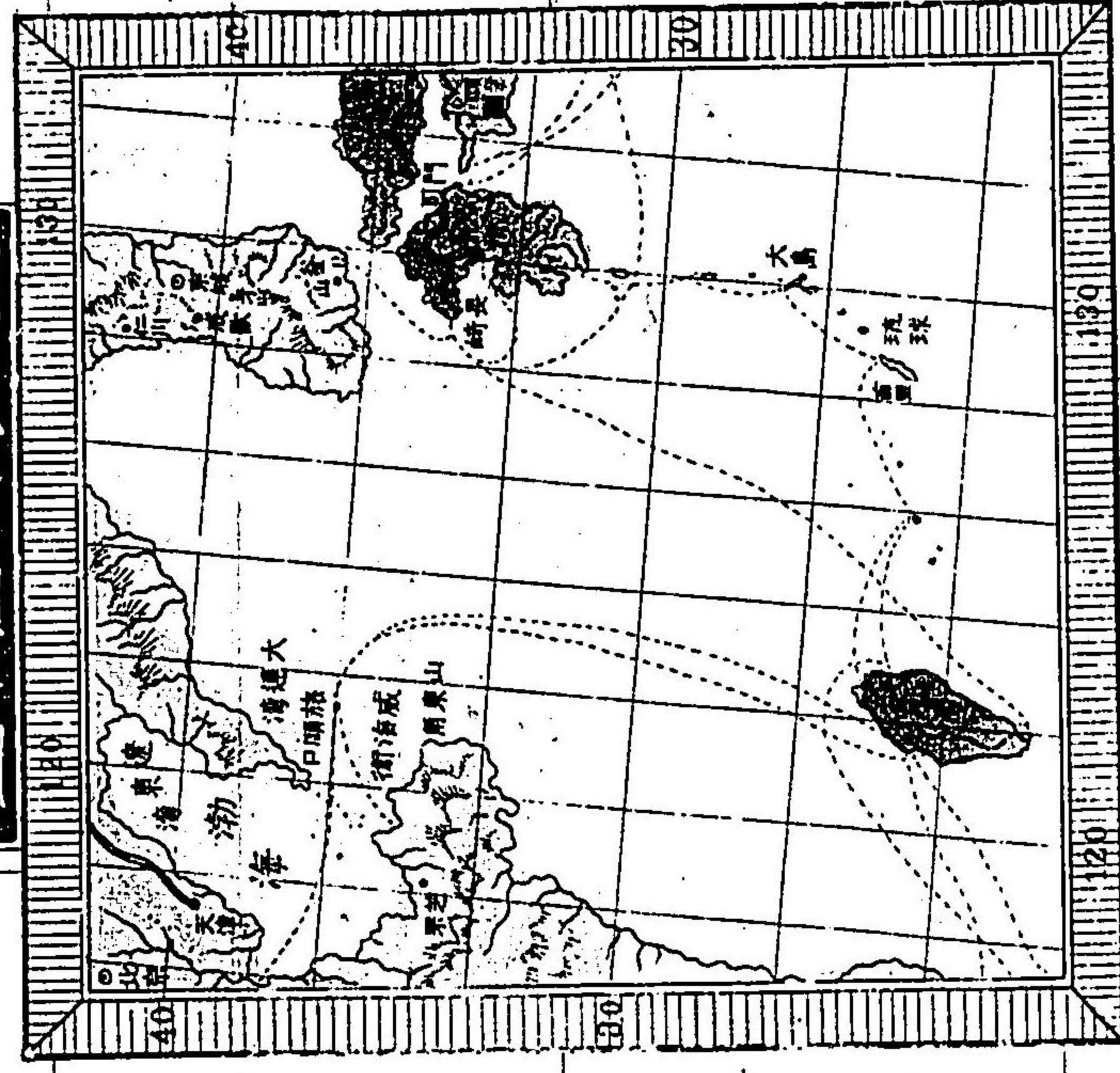
鈴木茂行

印刷兼發行所

東京市浅草区 浅草町十五番地

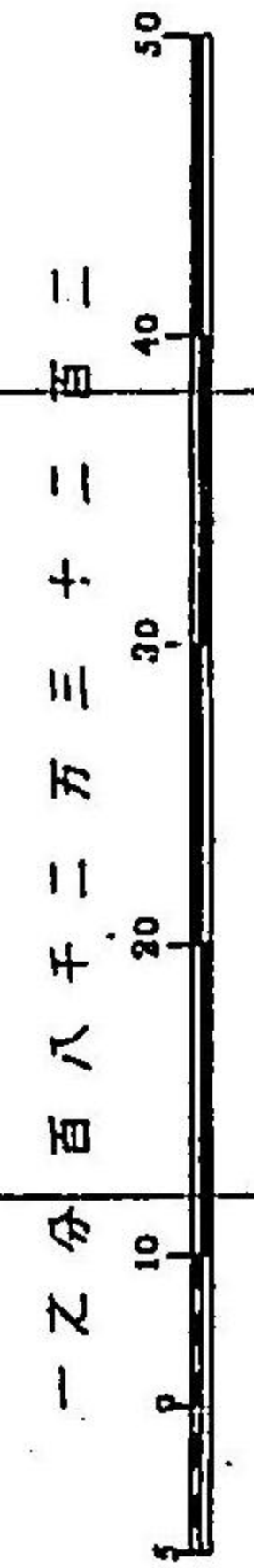
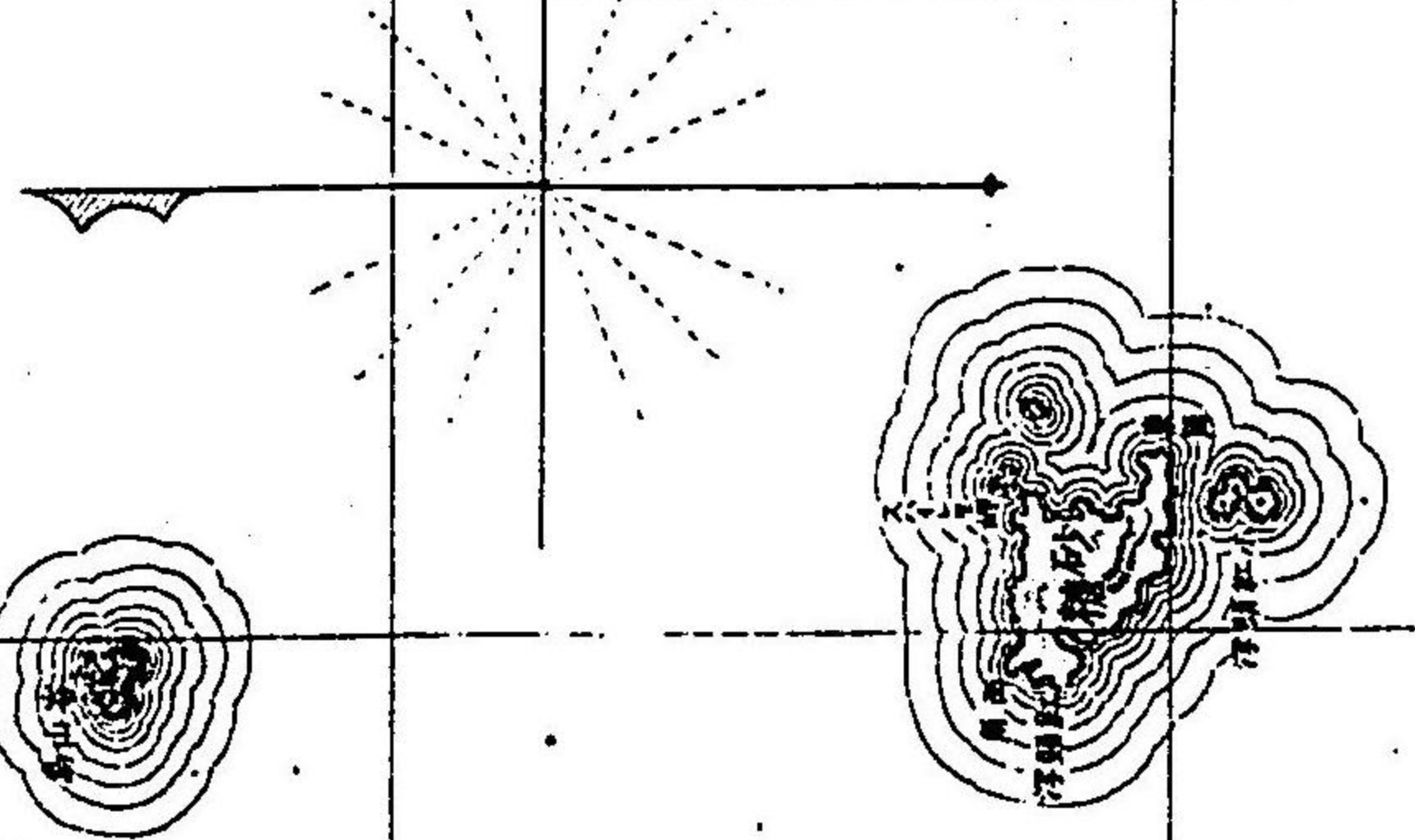
瀬山佐吉

# 位置圖

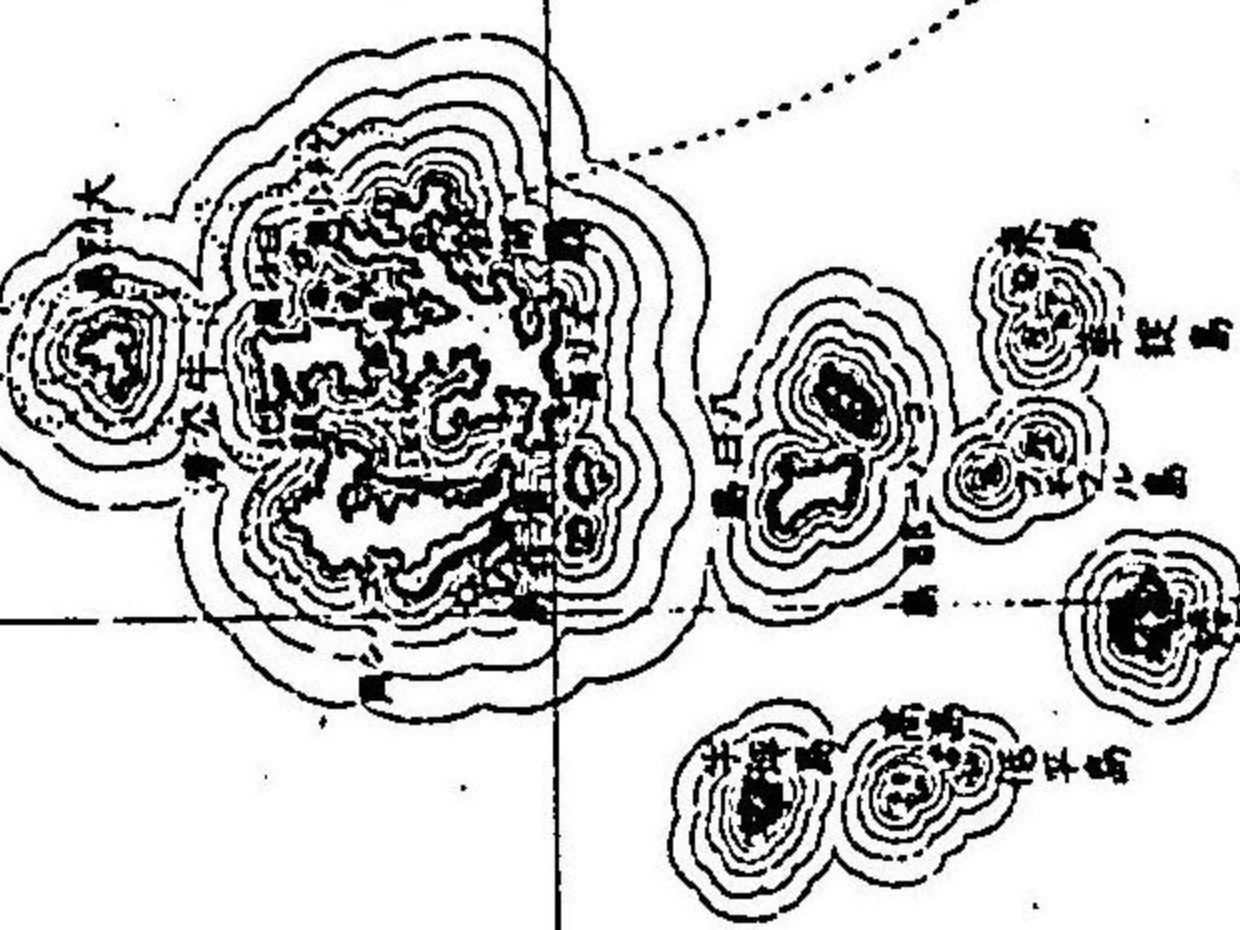


積合表

緯度	廿一度五
經度	一百零五
面積	二百零五
人口	一萬零五百
山脈	力才山脈
河流	力才川
湖泊	力才湖
島嶼	力才島
其他	...



## 澎湖列島



## 凡例

番境	電信	木許市
縣界	鐵道	電信局
干潮	公路	兵營
滿潮	小路	山港
沙濱	航海	燈台
河川	府	砲台
山嶺	縣	沙洲島
湖池	廳	未定濱
鐵道	市	岩岬



地 理 風 俗 台 灣 事 情 目 錄

風 俗 台 灣 事 情 目 錄

○ 位 置 及 廣 袤	○ 人 口	○ 沿 革 史	○ 氣 候	○ 河 流	○ 港 灣	淡 水 港	基 隆 港	打 狗 港	安 平 港	蘇 澳 港
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
九 頁	十 四 頁	十 四 頁	十 五 頁	十 八 頁	十 九 頁	二 十 頁	二 十 二 頁	二 十 四 頁	二 十 四 頁	二 十 五 頁



錄目情事灣台俗風理地

○ 施政上の區劃	二五頁
○ 都會	二六頁
台北府	二六頁
市街	二七頁
石垣	二七頁
道路	二八頁
近況	二八頁
基隆廳	二九頁
家屋	三〇頁
道路	三〇頁
蚊軍	三〇頁
近況	三一頁
基隆市街一般衛生概況	三二頁

錄目情事灣台俗風理地

一般の地質	三二頁
樹木繁殖の度	三三頁
給水	三三頁
氣象	三四頁
便所	三五頁
職業	三五頁
疾病	三五頁
花柳病	三六頁
墓地	三六頁
常衣	三六頁
常食	三六頁
阿片喫煙者	三七頁
台南府	三七頁



地 理 風 俗 台 灣 事 情 目 録

○ 台北基隆間紀行	三十八頁
○ 物産	四十頁
○ 風俗	四十四頁
○ 台灣日用語學	五十一頁
○ 台灣一般	五十九頁
○ 運輸	五十九頁
○ 航海	六十頁
○ 食料品	六十頁
○ 言語	六十一頁
○ 土民	六十一頁
○ 土地	六十一頁
○ 現在の事情	六十二頁
○ 實業問答	六十五頁

地 理 風 俗 台 灣 事 情 目 録

○ 貿易談	七十四頁
○ 台灣商業一般	七十九頁
○ 製糖業の現況	八十三頁
○ 颶風時期	八十六頁
○ 基隆葬儀の話	九十頁
○ 大毒蟲蠍子の話	九十一頁
○ 澎湖島	九十二頁
○ 地形	九十二頁
○ 氣候	九十三頁
○ 土民	九十六頁
○ 近況	九十七頁
○ 良水	九十七頁
○ 奇刑	九十七頁



地 理 風 俗 台 灣 事 情 目 録

目 録 畢

○ 實業家の台湾	.....	百十二頁
○ 台湾の衛生	.....	百七頁
○ 台湾の一夜話	.....	百九頁
地 價	.....	九十九頁
守 衛	.....	九十九頁
墳 墓	.....	九十七頁



地 理 風 俗 臺 灣 事 情

附 明 細 新 地 圖

寒 英 居 士 編

◎ 位 置 及 廣 袤

我帝國の新版圖に屬したる台湾島は北緯二十一度五十分に起り廿五度十六分に達す東經百二十度十五分より百二十二度に至る東は沖繩縣最南端諸島に接して太平洋を控へ西は台湾海峡を隔て支那と相對し南は呂宋に連り北は沖繩縣琉球諸島に隣る今之れを地圖にて見る時は我國の九州よりは小にして四國よりは大なる様あるが實は中々左る小島にあらず面積は九州四國を併せたるよりも大なる事二千余方里とあす





門附  
臺  
灣



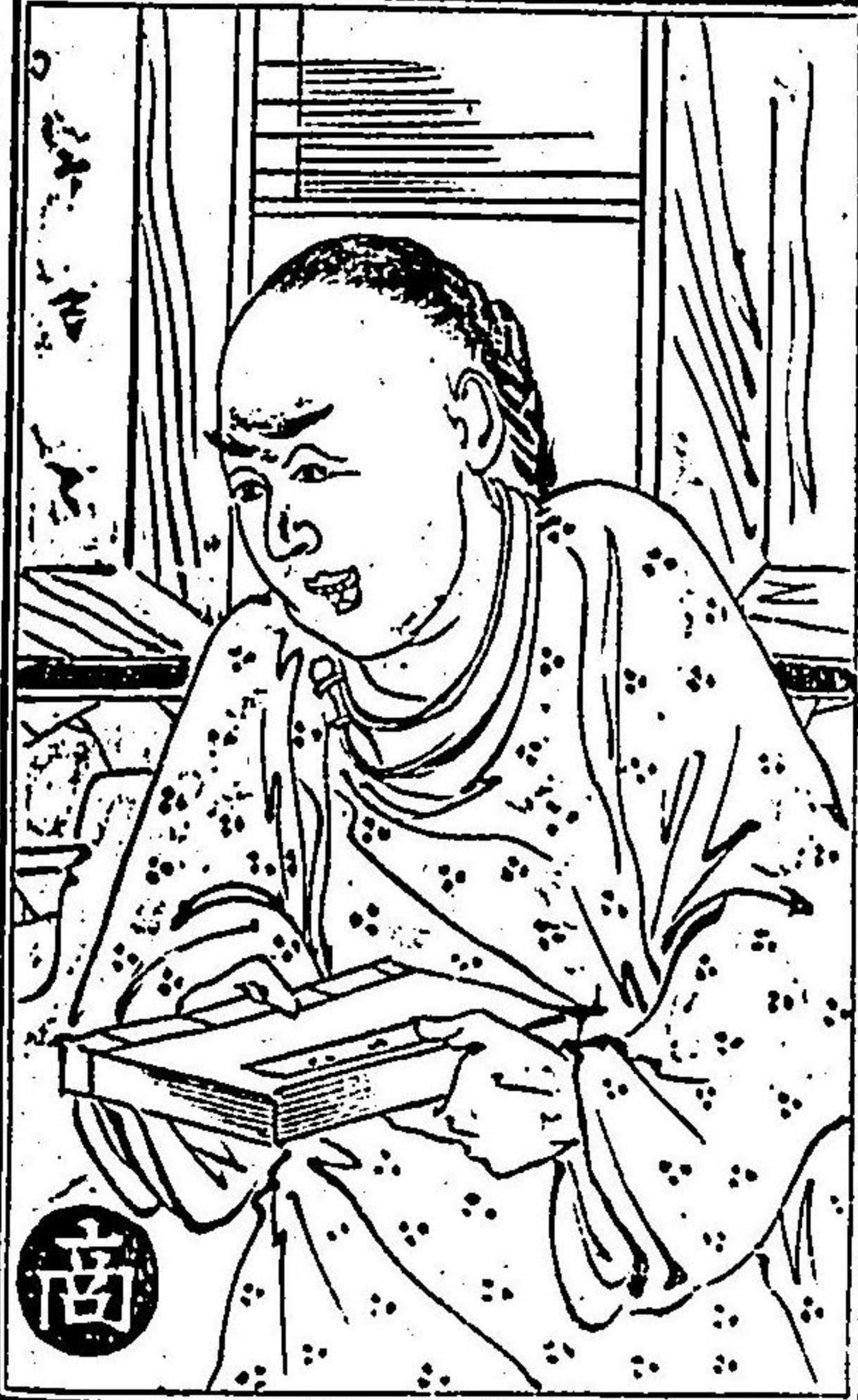
聽縣北臺



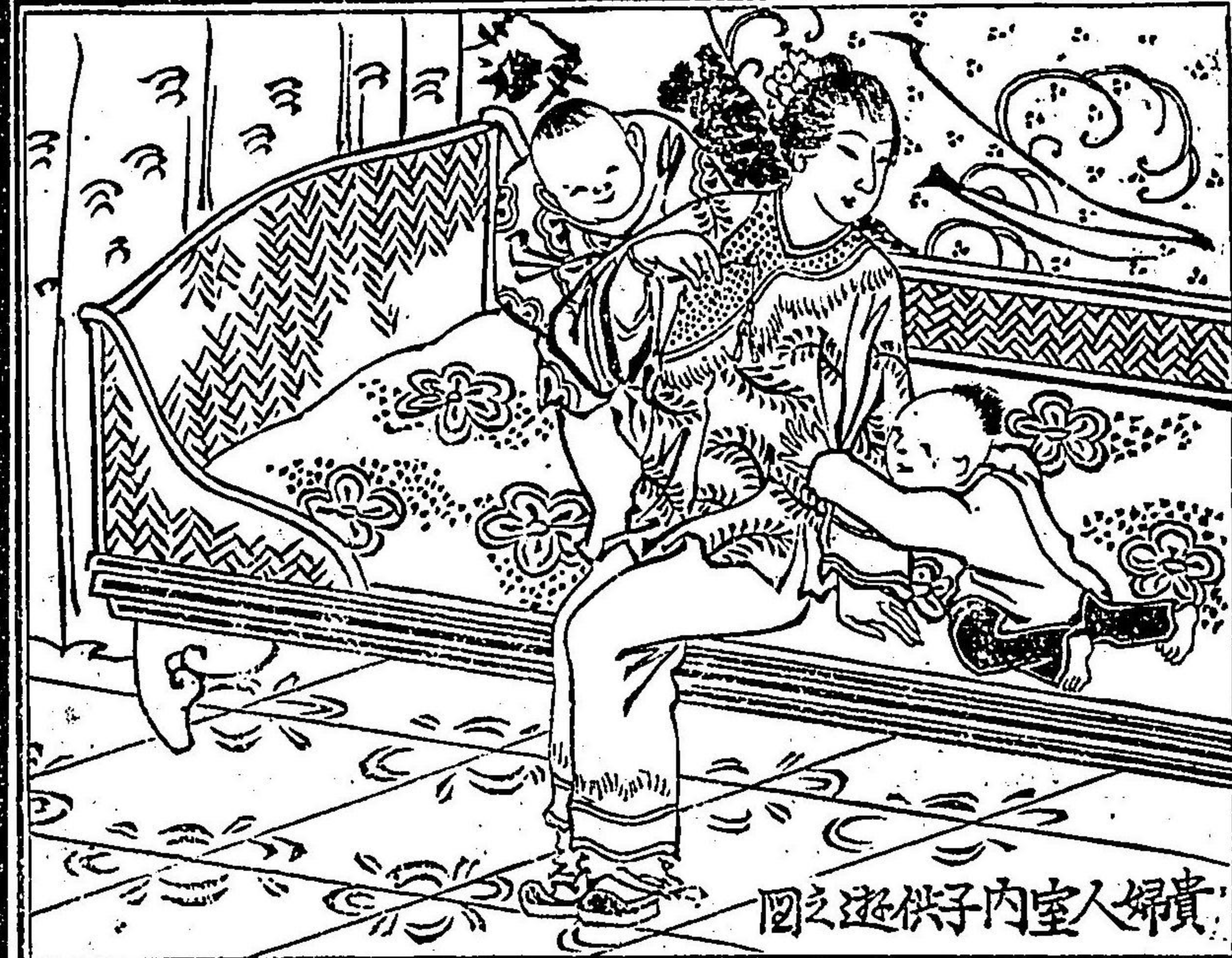
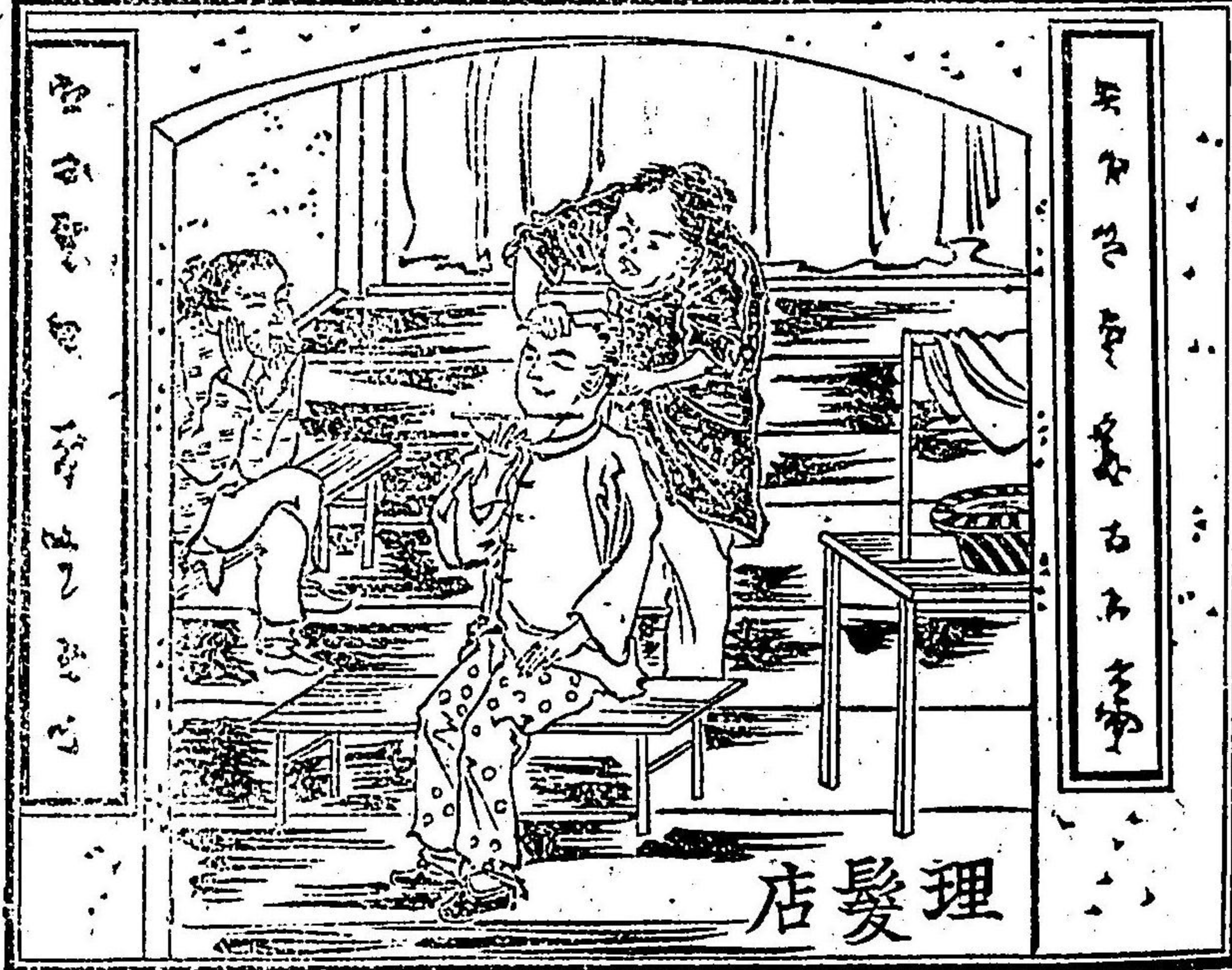
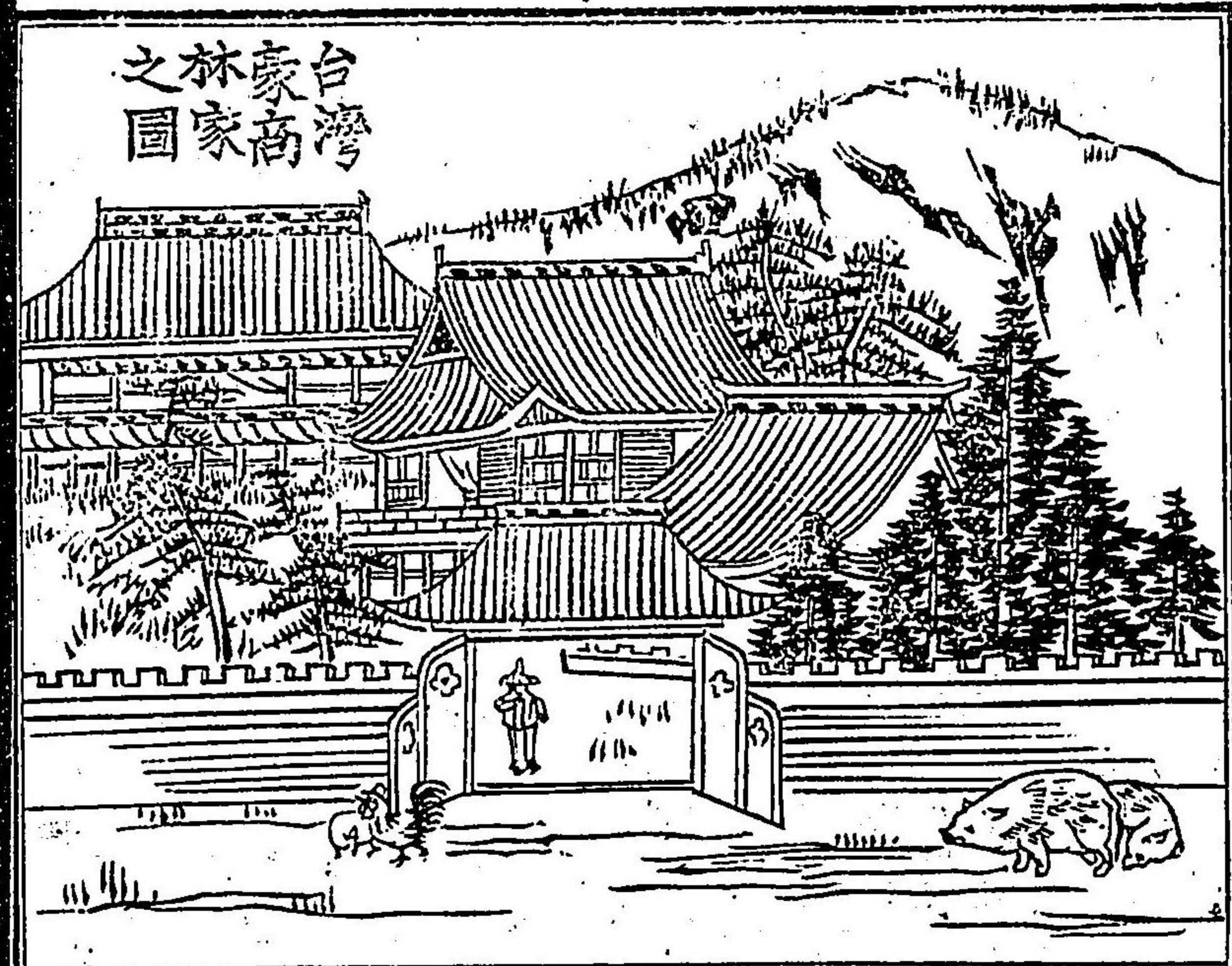
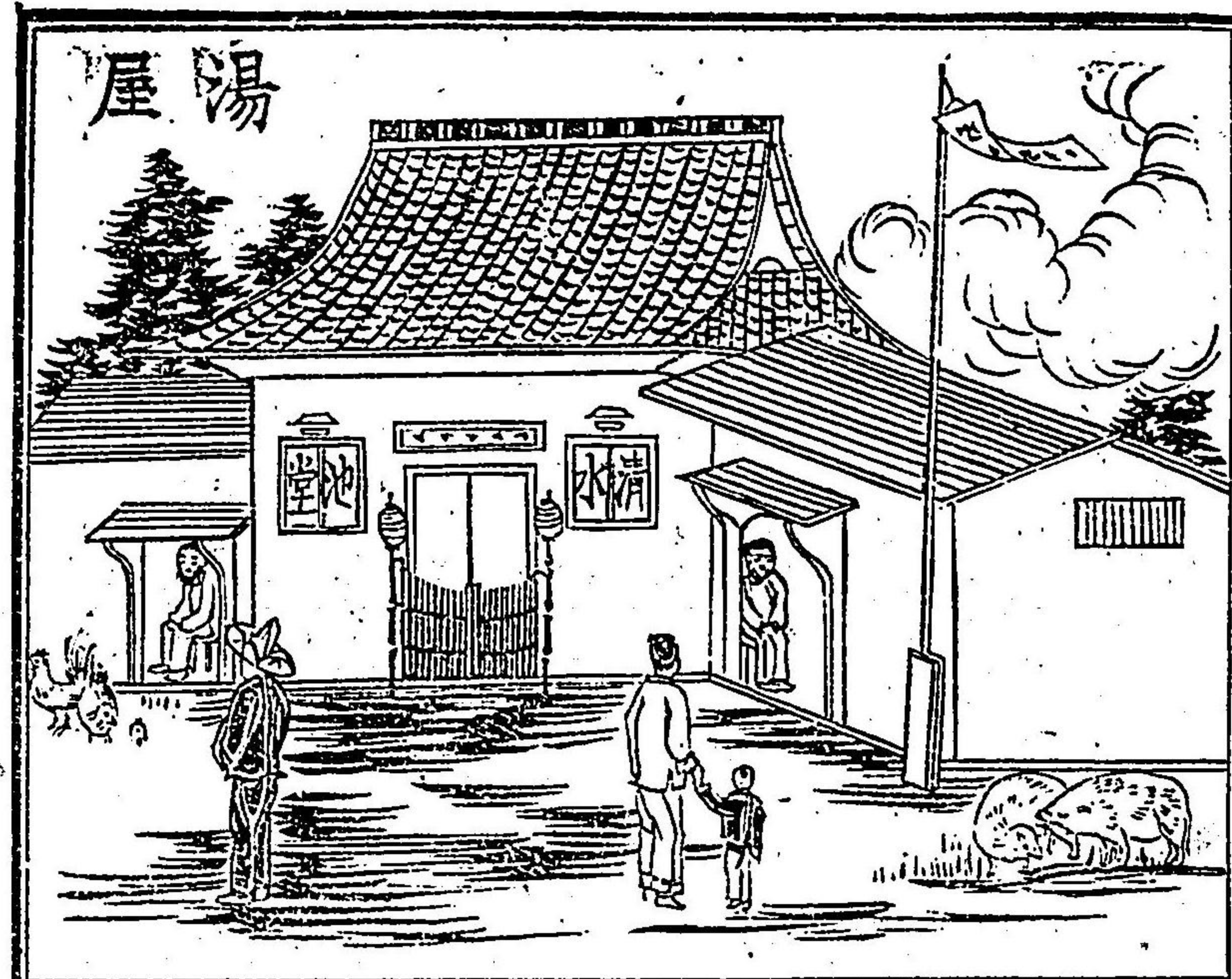
門附  
臺  
灣



聽縣南臺









地 理 風 俗 台 灣 事 情

人口は支那人種熱蕃族生蕃族等を併せて大約三百万以上なれども未開國なるを以て充分の調査を遂ぐる能はず爲め確實ある數を得る事能はざるなり

◎ 人 口

◎ 沿革史

台灣島は古來蕃族の住居地あれば正史の見るべきは勿論なれども西班牙人和蘭人等の此地に漂流去て始めて泰西國人の知る處となる而して其中尤も歴史ら去くして記さんとするは明の鄭芝龍の子成功なる者父の志を襲ぎ衰運を克復せんと欲して一族郎党を帥ひ是れに據る然れども遂に勢振ふ能はず清帝の亡ばす處となる後明治七年我國民の此地に漂着せざるを殘忍にも殺戮せしむるを以て蕃族征討の師を出し悉く之れを降伏せしめ凱旋せしが今や新たに我版圖に屬して皇化の惠に霑し以て帝國の一要鎮たらんとす

◎ 氣 候

台灣の氣候といへば大抵世人は酷熱の土地と思ふらん然れども實際然るにあらすして極暑の時といへども寒暖計は九十六七度を超へず勿論之れは室内の温度なれども屋外に在つては百十三四度を昇降す然れども濕氣を含めるを以て土民風の家屋は苦熱甚ましく名狀すべからず外に別に不快を感じるは即ち曉天の冷氣に會ふては大に人身を害すへ裸体同様にて熟睡する物此曉天の冷氣に會ふては大に人身を害するものなり  
秋冬の候に至れば西南の風烈しく吹きて時々降雨あり故を以て暑熱は左きて恐るに足らざるなり



地 理 風 俗 台 灣 事 情

左に示すは其筋の調査に係るものにて台湾北部に於ける明治廿年より廿四年に至る五ヶ年間に於ける各月最高低の気温平均表なり

月	最高平均	最低平均
一月	七五、二	四五、二
二月	七五、	四五、
三月	七七、九	四六、四
四月	八六、一	五一、四
五月	八八、四	六〇、六
六月	九二、九	六六、二
七月	九六、七	七二、四
八月	九六、八	七一、四
九月	八九、八	六八、四
十月	九〇、	五九、五

地 理 風 俗 台 灣 事 情

五ヶ年間の平均気温は既に之れを以て明なり仍て酷熱中の気温に付き再、ひ左に記さん

月日	朝	晝	夕	最高	最低	天候
十一月	八二、			五六、		
十二月	七七、二			四九、六		
七月	九時 地名	二時 地名	九時 地名			
廿六日	八六、九 台北	九五、台北	八六、九 台北	九五、	八六、九	快晴
廿七日	八七、八 台北	九五、台北	八六、五 台北	九五、	八六、	全
廿八日	八六、九 台北	九三、台北	九三、 台北	九三、	八六、	全
廿九日		九一、行軍 途上				晴
三十日		九一、中歴				全
卅一日						全
八月						十七



地 理 風 俗 台 灣 事 情

一日	九二、	途上	九二、	大湖	八七、	八七、	快晴
二日	八〇、	途上	八八、	新竹	八二、	八八、	快晴
三日	七八、	室内	八八、	新竹	八四、	七八、	微風
四日	八三、	新竹	八八、	新竹	八八、	七八、	全

十八

(備考)

温度は華氏寒暖計を以て室内に於て測量す  
 表中二十九日より八月二日に至る間は恰も台北府より  
 新竹縣に至る行軍途上ありしを以て往々測定を欠ける

所あり

最高及び最低温度は其日の日出より翌朝の日出に至る  
 間の温度あり

◎ 河 流

河流は多く西方に向つて流る然れども大河は少くして小川は各處に

流るれども何れも河口は一の海口あれば小船を掉して往復運搬の  
 便を助くる事多とす中に就き尤も著名ある大河は

淡水河

大甲河

の二流とす即ち淡水河は延長三十余里に達し流水は急激なるを以て  
 舟楫の便悪くあれども淡水港に入るを以て河口は大に去て船舶の  
 出入の便をなす大甲河も水流急激なれど深さ左去て深からず河邊は  
 良好の茶を産出す

其他小流に至つては枚舉に遑あらずと雖鳥石八槩曾水等の河流は多  
 少名高きものあり而して是等は何れも皆流を生蕃の住居界なる山脈  
 中に發す故を以て西方部は沃野多く地味饒豊あり

◎ 港 灣

地 理 風 俗 台 灣 事 情



地 理 風 俗 台 灣 事 情

港灣は多くあれども良港に劣しく而して悉く西部及西北部に屬す東部には船舶を泊すべきの港は一二の物を除けば皆無と云ふも可あらん何となれば東海濱は山脈屹然として聳ゆるを以て斷崖絶壁削るが如く港とするに足るものなま今其主要なる良港を掲ぐれば第一淡水港第二基隆港第三打狗港第四安平港第五蘇澳港となす

淡水港

淡水港は一名滬尾港と稱し淡水河の注ぐ港みえて西北部の一良港也然れども遠淺にして水深からず爲めに大船を碇泊する事能はざるも滿潮の時には吃水十三四尺の船は出入する事を得故を以て一度改築工せば實に完全なる良港とあるべきも憾むらくは港の小あると大雨の降る毎に上流より泥沙を押し來り洲を生じて船舶の出入を妨ぐると一は西北風の烈まゝ荒るゝ時は港内頗る浪高くして船舶の安全に碇泊し得ざるとなり

地 理 風 俗 台 灣 事 情

市街は頗る繁華にして戸數千余市並は淡水河の東岸に沿ふて横列をみえ背後に山を負へり而して茨米兩國領事館及汽船會社の代理店ありれども外國人の此地に常住する者は實に尠く多くは他地方に住居す其故如何を云ふに一は熱病の非常に流行すると一は此港開港場よりは相違なきも其實此所は貨物の積替場に過ぎざるなり實際貿易市場たるの價値あるは台北府城外の大稻埕なりとす産物中の屈指たる茶及樟腦等は何れも皆此大稻埕に集り此處より即淡水港に送り淡水港にて税關の手續を繼直ちに支那行の汽船に積替るものなれば實際商業の地には非らざるなり

税關は港の入口にあり從來清國政府の手に屬したる時は外國人を僱て事務を整理せしが現在に於て日本人を以て組織し外に支那人三四名を使用せ居るに過ぎざるなり

海岸には砲台の備へありて守備堅固ある如く見ゆ是れ即天然の形勢



地 理 風 俗 台 灣 事 情

宜まき故先づ要害の港なりとす

基隆港

基隆港は三面山を以て圍み恰かも屏風を立て列ぬたる如く其曲折の各部には破台相對峙えて如何にも形勝の良港たりと雖水深き割合に港澳は泥砂に埋もれて僅にボートを以て往復し得るのみ夫れも干潮の時に於ては能はず且つ港内頗る狹隘を感て夥多の船艦等を繫泊するに足らず市街は多く支那家屋に於て二三の外人邸宅と税關を除けば他に見るべき壯觀もなく豚小屋の如き陋屋の連續したる如き光景あり然りと雖台灣島の北部に於ては先づ一の良港なり  
税關所は頗る大なる建物に於て三四の家棟も分れたり  
砲台は何れも堅牢に造られ勇壯絶快の固めなりと雖嘗て佛國艦隊の砲撃する處となり相對峙せる六砲台が一舉にして陥られたりと云ふ  
北港は菓實菜穀は豊かならざるも石炭は台灣の産物中著名なるもの

地 理 風 俗 台 灣 事 情

一又去て其探掘地と去て世人の熟知する所なるが重に粉炭にして炭質も我北海道炭及び九州炭に及ばざる如き従來台灣政廳の所有たりし炭坑は一丹坑 坑の廣さ十七呎坑座の深さ百十呎 二方坑 坑口の廣さ十呎坑座七十呎 三平坑 坑口の廣さ十二呎其高さ六呎に於て坑底に道を設す其長さ二千呎なりと明治十七年佛軍の爲に占領せらるゝや炭坑及び機械類とも悉く破壊され去かば爾後探炭中止の有様となれと後劉銘傳は一の便法として私有炭坑自由探掘を許可せまも不熟練の支那人が不完全の機械を以て探掘する事とて其量僅六十噸に過ぎず賣行も悪ければ台灣政廳は破壊炭坑を修理して英國技師又監督を托し新機械を以て探掘せまかば二十年頃には一日の掘採高凡百噸余とあり事業稍整頓の緒も就きしも無經驗無智の官吏が施す所の處置萬事其當を得ずして費用償はざるにより劉銘傳の獨斷を以て鐵業一切を廣東商人某に依托し物議を招ぎて罰を蒙り去が



地 理 風 俗 台 灣 事 情

爾後猶割は改良を企て或は歐人を増聘之或は私有炭坑の自由探掘を  
嚴禁する等種々の方策を採て専心産出の増加を計り稍目的を達して  
歐人も遂に解雇するに至り去なりといふ而して基隆港の石炭は今に  
至つて産物の名ある中の一とは數へらるゝなり

打狗港

打狗港は未來の台灣一の最良港たらん然れども現今は水如何にも淺  
くして吃水深き大船にては出入する事を得ず去れども一朝港内の浚  
濬工事を終るに至らば實に天然自然の地形上良港たるの價値充分な  
れば如何なる軍艦大船も安全に碇泊し得るなり殊に此港は他の港と  
大異に去て激浪高きが常なる海岸も此港は獨り安全に去て避難所  
と去て避難するを得べき西部の佳良港あり

安平港

安平港は又西南部の一良港あり是の港は船舶の繫泊所としては實に

不便利ある港あり何となれば港内泥砂多く加ふるに浪高く彼の西南  
の風烈き時は安全に碇泊する事を得ざるされば港灣乏き台灣島  
にては又良港の一に數へらるゝなり

蘇澳港

蘇澳港は東部にありて未だ貿易港たらずと雖水深く去て船舶の出入  
自在なれば改築せば一の良港とあらん

◎施政上の區劃

台灣府に隸屬するもの

台灣縣

彰化縣

雲林縣

苗栗縣

埔里社廳

台南府に隸屬するもの

安平縣

鳳山縣

嘉義縣

澎湖廳

地 理 風 俗 台 灣 事 情



地 理 風 俗 台 灣 事 情

恒春縣  
台北府に隸屬するもの  
淡水縣  
新竹縣  
基隆縣  
宜蘭縣  
台東直隸州

以上は即ち現今の台灣區劃に於て施政上の方便を圖りて明治二十年即ち清國光緒十三年劉銘傳の定められたるものなり

◎ 都 會

○ 台北府

台北府は淡水河に沿ふて南より北に延ぶるものに於て僅か四里を下れば淡水に至るを得城廓嚴めまゝ市街は整然として家屋櫛比す其内居留地尤も繁華なり府城は小なるも北西二門外共に廣大の甬道を有す兵營兵器製造所官舎學校其外々人居留地の家屋等は宏大の建築として數ふべきあり

市 街

基隆よりも立派に於て道路も廣く於て數屋を連ねたる石造の家屋より成り中間を公道とし左右の軒下を以て買賣人の往來に充つ其狀恰かも我新瀛縣地方の軒下を通ぎて通行せらるゝが如ま蓋ま新瀛縣地方雪多くして積る事丈余街路歩すべからず故に軒下を通じて往來せまむる事を得るあり(台北府の軒下の道路は蓋し雨を避け日光を遮らん爲めに此に至りしものならんか其雜沓不潔なる事實に名狀すべからず且つ泥と尿とを以て掩はる豚は其間に蠢爾たり之れを思へば整然たる市街といへども亦内地人の夢よだも知らざる所ならん  
總督府は舊台灣省廳の跡に在り

石 垣

台北全府の周圍に石垣を繞らせり其石垣の廣さは三四尺もあり所々

地 理 風 俗 台 灣 事 情



地 理 風 俗 台 灣 事 情

に我東京の見附の如きものあり番兵之れを警衛す

道 路

道路は中央より二條の石を敷き詰め人力車は其上を走ることゝす故に車は甚だよく動揺せず車夫は皆支那人として頗る速なり

近 况

夫の有名なる烏龍茶は目下(六月頃)其期節なるが當地を中心として到る所に盛んに之れを製し居れり元來台地の産物を大別すれば台北は茶台南は砂糖樟腦等なるが茶は淡水より輸出えて關稅一ヶ年間に百五十万テール以上ありと云ふ

當府の南里許に林維源あるものあり世々豪族とまで有名なり其一族は全島到る處に住居を占め農工商事業を爲さんとするものは必らず此家に倚らざるべからず就中農業上に就ては無上の實権力を有之居るものなり

地 理 風 俗 台 灣 事 情

當地に於ては官民交通の媒たらしめんが爲め俱樂部創設の企あり淡水河に沿ひて風光佳絶の地域を擇び内地風の一家屋を建築せんとする由ありと

山野一帶樹木に富むと雖家屋を建築し器具を製作するの材木に乏む故を以て不當の高價を拂つて此地の材木を購はんより寧ろ内地より持ち行きて用材よせん事利益あらん蓋し此地の材木は多くは福州遠より來るものなり

○基隆廳

本邦宇品を發三晝夜にして基隆港より着ん之れ即ち基隆廳の設けある處なり先づ港口に入れれば左右に一ヶ所宛の砲台あり港内廣げれども水淺くして大船を入れ難し税關前まで千五六百噸の船を入るを得べし港より望めば三面山に包まれ其山麓に基隆の市街あり大さは我横須賀位あるべく海岸より市街までは五六町もあるべし



地 理 風 俗 台 灣 事 情

家 屋

家屋は赤煉化作にえて二階作は二三戸あるのみ他は平家あり

道 路

道路は大通りよて二間幅なり狭き所は一問幅位なりなれど家屋の軒先きは我越後のガンギの如く一間位も空出したれば通行人は其下を往來する事台北府又異なる處なし道路は又石を敷きつめてあるを凸凹甚だ去くして所々小橋を架せり故に車などは一切用いらるゝことなく運搬は總て人肩あり

蚊 軍

蚊軍は台灣地方至る處として甚だまきも未開の地あるのみならず殊に本邦人は此地に始先て渡海せま者多く爲めに蚊帳の用意もあくまて防禦の策も窮し居るに遠慮なき蚊軍は群をなして身体を襲ふ然る時は此儘蚊帳も釣らずありては苦悶するのみ故に手には手袋をま

地 理 風 俗 台 灣 事 情

近 况

とい足には靴下を穿ち頭は布にて頭巾様のものを被り以て漸やくにえて苦難を避くるといふ然れども銳利なる刺は衣類手袋等の上よりして直ちに皮膚に通り暑熱と共に眠れず漸く半夜過ぎて後始めて寢に就く事を得之れも之れ苦悶の余り疲勞して茲に至るなり

民政支廳長は即ち伊集院兼亮氏あり氏は薩摩の人今其經歷を聞くに師範學校幹事文部省書記官紡績會社社員等を経て今回基隆民政支廳長となれりと云ふ而して其施政も亦當を得たる方針にえて氏は有力ある支那人某を聘用して之れを總理と號し其顧問に充て成る可く舊來の慣習又従て事務を執行するに依り土人皆悦伏せり嘗て混成部隊歸國の際の如きは土地の重立ちたる者數十名を此總理が引率えて海岸まで見送りたりと以て土着人の意向を察すべきあり後西京丸にて海軍戦死者の祭典を執行せる時も伊集院氏は此總理を同伴したりと



地 理 風 俗 台 灣 事 情

よ彼れは深く我海軍々人の懸遇を悦びたりと之れ伊集院氏治下施政の宜えきを得し故ならん  
基隆總市街の戸籍調べを遂げ去結果を聞くに都合十二ヶ町戸數千二百軒人口六千一家五人の割合なりといふ

◎ 隆基市街一般衛生概況

一般の地質

地質は粘土多く海岸は砂土を混する部ありといへども一般緻密の土塊にて常に濕潤し砂粒塵埃の飛散する事少なく既に日中炎熱に曝露の土石は滲水するも水分の蒸散吸収等遅し之れ一は空氣の湿度又關そべしと雖亦以て土質の水分に富るを証するに足るべく灣底を退潮の時撿するに又粘土よえて恰かも泥沼の如く臭氣不潔極りあし概ね當市の土質たるや大概濕粘土様にて泥土の少しく乾燥えたるものと

地 理 風 俗 台 灣 事 情

見て大差なきが如玄

樹木繁殖の度

市街に樹木なく周邊空地の一部分に雜草を生ずるのみ而して市街を離れ田野丘陵山岳に至れば草木繁茂するも喬木なく僅かに少なる松竹の林を成しあるは過ぎず其他のものは概ね水田なり

給水

市街幾多の井水ありて飲料に供し又山間より谿水を引きて供用するを見る而えて是等井水の位置たるや近傍家屋の不潔の處にありて構造不完全なり水底淺く其周圍汚水竄透を防禦すべき何等の設計なく僅かに表面を石材を以て圍擁するに過ぎず上方被蓋の設け更にな故に雨天のときは井水速か混濁えて便用すべからる然り而えて茲に特記すべきは是等不良の井水を飲料とするは當り未だ澄水の方法を知らずと雖古來の習慣より飲用水の良否を區別して井水中雜用と



地 理 風 俗 台 灣 事 情

飲用とに供するものを異にするると其煮沸したるものにあらざれば飲用せざるにあり是れ一般土民中に行はるゝにあらざるべきも亦茲に多少衛生法の存するを證明するに足るか市街各所も存在する十六個所の井水泉水(井水十、泉水六)を採りて水質検査を爲す其成績を概算するに飲用に供すべきもの少く一般に格魯兒硝酸有機質等多量にて石灰分之れに次ぐ是れ土地不潔にして排水法なく汚穢物は至る所に堆積し且つ海濱に接近する等最大原因なりと雖亦井水の造構不完全にして汚物の竄入を免れず蓋飲料水を去て不良に陥らざるに至る所以なり

氣 象

氣象領要未だ詳ならず土人の言に依れば夏天雨多く毎年十月より翌年三月まで雨量多く冬天は一ヶ月中雨天十五六日春天は一、月十二三日の雨天ありといふ孰れも霖雨濛々甚だ不快を感ずと云ふ又當地

地 理 風 俗 台 灣 事 情

に數年住居きたる米國人某氏の言に依れば冬天一ヶ月間一日の晴空を得ば最幸福なりと或は形容過ぎたる觀なきにもあらざるも又以て雨天の多き理を知るべしか而して夏日の温熱は内地と比ぶ大差なし然れども空氣は濕温にきて多量に水蒸氣を包和せり故に吾人の蒸發熱を吸取せし所謂蒸氣暑く朝夕は僅かに冷涼を覺ゆ

便 所

男子用として共同大便所三ヶ所あり即ち媽祖宮口、鴈重橋、草店尾街等に設置せり人家の後方に一定の場所を設けたる者も極めて少なし其他各所も下便し犬豚の食に任す(自然的掃除法)婦人は室内に於て一つの桶を備へ置きて排便を毎夜海邊又は溝井に投ず

職 業

米商阿片商を最多とぞ賣魚店布店之れも次ぐ

疾 病



地 理 風 俗 台 灣 事 情

疾病は土人醫の説より夏日は吐瀉痢病熱病多く春秋は瘧感冒咳嗽病  
多く冬期は傷寒傷風多しと云ふ

花柳病

公許の娼妓なま然れども密淫賣は市内に二三百名の多數ありといふ  
別に一定の場所なく各所に散在す而して多くは有夫者とす檢梅法は  
無論なきも案外花柳病なまといふ(基隆支廳調)

墓地

墓地は市街後面の山腹に在り構造は土満頭にて富者三四尺貧者二三  
尺の高又土を堆積して棺を埋む

常衣

洋布多く棉花布之に次ぐ冬期は多く羅紗を用ふと

常食

常食は米にして副食物として魚肉豚肉等を食す

阿片喫煙者

阿片を喫煙するものは北方より比々非常に多まと思ふに十中の五六は  
皆鴉片喫者と見て可あるべし

右は在基隆三等軍醫清水芳太郎氏外二氏が其筋へ報告せしを摘  
載せしなり

◎台南府

西は海に面す東南北の三面は砂礫の地のみ多し此府は元と台湾の首  
都なりまが不便を感ずる多きを以て首府を移えて此處を台南府と稱  
す市街は台北基隆の如く石を布き人口は殆んど十四万なりといふ。  
台湾には都會として見るべきは以上の三府を除きて他は無しと云ふ  
も可なれども縣廳の設けある所は多くは繁華にまて指を屈すべきあ  
り今其中に付主なるものを擧ぐれば



地 理 風 俗 台 灣 事 情

等に去て重に西部に屬するものあり

鳳山縣  
淡水縣

嘉義縣  
安平縣

彰化縣

三十八  
新竹縣

◎基隆台北間紀行

基隆より台北に至るの行程は凡八里なり基隆より台北に行かんども  
る又は陸よりすると水よりすると二條の方法あり陸よりするは鐵道  
及び鐵道路を通行す水よりするものは水返脚(基隆より三里まで陸行  
去夫より淡水河を船にて上るあり他に道と名づくるものか去鐵道は  
我京濱間の如くに去てあれを運搬力極めて不十分に去て一の汽罐車  
に貨車二輛客車一輛を繋ぐに過ぎず何とあればレールの散設屈曲高  
低甚くして到底多の車輛を運ぶに堪へざればなり且其客車は敗  
兵等の仕業と見へ窓の戸もなく室の戸を支へる柱は切り刻まれ腰掛

地 理 風 俗 台 灣 事 情

は半ば取拂ひたるを以て俄作りの杉の四分板にて間に合せたれば上  
ンチルを潜る時などは咽々程なり基隆台北間は前又は四時間も掛り  
去が今は二時間前後にて通ふ此鐵道は所謂田甫道なり道路の左右は  
總て水田あり沿道及附近の山岳は如何にも金州附近の比にあらすし  
て滿山青々たるを見れども未だ大木の繁茂するを見ず平地には非常  
に竹藪多く人家ある處には其周圍に必ず竹林あり其竹は皆一種に去  
て日本には其類を見ず眞竹にあらす孟宗にあらす端竹にあらす其葉  
は孟宗の如く細多に去て其幹は眞竹に似たり其根は互に密接して藪  
生じ離れて芽を出すことなきものゝ如去土民は之れを以て椅子をぞ  
を作り其他種々の用に使ひ又之れが筍を食へど日本の如き煮方にて  
は苦味ありて食去がたし土人は此苦味を去れたるものか或は他煮  
方の秘傳あるものにや此遊土民の面相は一般に北清人種と異り眼光  
鋭して概して瘦長きもの多く少しも愛嬌氣なし女子は中にも横着よ



地 理 風 俗 台 灣 事 情

して日本人の集合し居る所も平氣に通行せり此婦人等は老婆にても  
造化生花等のかんざまを挿し居れり異様と思ひて之れを問ふに之は  
夫わゝる證なりといへり台湾よての飲食物は餘り不自由を感せず特  
果實多くパイナップル、バナ、西瓜、胡瓜、茄子、カボチャ、冬瓜、桃李、梨、其他  
の野菜多く其中のカボチャ、冬瓜の如きは巨大なる者ありて二箇にて  
馬一駄となるべきものすらあり之れに反して案外に小なるは西瓜に  
まて茄子は色薄くして皮厚まとは此頃歸京またの某紳士の紀行談を  
り

四十

◎ 物 産

砂糖 台湾物産中屈指の一にして南は恒春縣より北は嘉義に至る  
一帯の間尤も多く産出し我國にても台地産の砂糖供給を仰ぐこと  
年々歳々に多々然れども砂糖事業に就ては下條に陳述せる處あり

地 理 風 俗 台 灣 事 情

又本邦人には頗る固難なる事業ありとぞ  
茶 は紅茶の一種にまて輸出先は米國に多々稀にはシンガポール及  
檳榔嶼へも輸出するなれど極めて少額なりとぞ今台北に於ける茶  
葉に就き水田榮藏君の台湾鎮撫録中に説明する處あり即ち其一節  
を抄せんま茶は北台隨一の物産にまて猶南台の砂糖の如し台湾北  
部至る所の山頂に茶畑を見ざるはなく是は皆地方の農夫に依つて  
培養せらる台北城外大稻埕の茶商は支那人あり英人あり皆粗茶買  
を出しに慣れたる支那人を使用ま多くは地方を巡回まて是等粗製  
の茶を買ひ集め更に大稻埕ま運び下りて是れを精製するものにし  
て稀まは農夫の自ら大稻埕ま持ち出ま信用ある茶商に賣り込むも  
のなきまあらず然れども是等は至つて少なしといふ是等の茶は一  
時是を上海に輸出ま更に米國に輸送するものあり(下略)  
米 は台湾輸出産の一にまて數種類ありといへども大概二作或は三

四十一



地 理 風 俗 台 灣 事 情

作にして淡水河邊に産するは頗る良好質の物なり然れども輸出額は余り多からず去て多くは内地住民の常食に充つるといふ然れども水田は善く稲作に適するされば収獲は多分に得らるゝなり  
石灰は基隆産のもの多額に去て鐵脈富有探掘せば後來見込みある輸出物産あり(詳細は前述せり)  
樟腦は北台地方の産に去て輸出物産中多額を占むるものなり而去て此産出所は世界中に於て只我日本内地と台灣と南米の某國のみなれば輸出物中屈指の一として數へらるゝは勿論あり殊に産額の夥多なる事は世界第一と稱するも不可なきされば將來に於ても實に特産の一といふべきなり  
硫黄は台北淡水間の山間にあるもの多額あり而去て多くは北部の産物なり而去て此地方の探掘を盛にせば後來有望の鐵脈あり  
砂金は多く生蕃の棲居せる山中に多し然れども未開の地たるを以

地 理 風 俗 台 灣 事 情

て其方法を知らず探掘の額も少とといへども鑛山業の盛に起るに至らば有望に去て特産の一と數へられん  
漁獵は海魚と河魚の別なく去て多額産す基隆附近の如きは漁師町ありて戸數一千あり小鯛松魚鯖鱈等尤も多く河魚は鮒鯉泥鰌鱖等を産す  
獸類は驢馬多く水牛は本邦人の馬を役する如く農耕に用ひ猿野猪兎等は山中に棲息し鳥類には鳩鴉家鴨等あり  
野菜菓物は何れも多く産す其實内地の物より大にして茄子は長さ一尺五寸に及び小なるは一尺三寸の長さあり冬瓜等は一抱へもあり南瓜も内地の産より二三倍の大さあり只西瓜丈は大さ内地の物と相似たり  
布類熱地に必需の布類も麻類能く出來る故極めて多く且其織地も内地の産より遙か精良なり



地 理 風 俗 台 灣 事 情

◎ 風 俗

稻 蒞

台湾の稻作は北部にて二作南部にては三作を収獲することあるが其蒞り入れは頗る奇なり先づ大盥の如き中徑四尺深さ一尺四寸程なる桶の周圍は長さ一間半余ある七本の竹を立て、柱と爲之に布を張りて恰かも盥の周圍に帆を張りたるが如くし其一方のみを開けて其所に太どき横木を附け之を距ること二寸許の桶内に薄き板を附け置き蒞りたる稻は此の板に打つけて穂を拂ふものにて日本の如く稻コキ器にて籾をコキ落とすにあらす此の如くきて籾を打ち落したる籾の葉は束ねて田面は乾かす桶の中に籾の満つるときは籠に入れて家に持ち歸るなり籠は竹製にて深かき箆の如くなるも上部は圓にまで下方は方なり此地の稻蒞につきて最も感ずべきは分業法の整頓

地 理 風 俗 台 灣 事 情

せることにて一人前の壯男は稻を蒞り又穂を拂ひ老人は穂の拂はれたる葉を整理し小兒は蒞り残りたる稻若くは落ち散りたる稻を取り集む

駕籠

台北の市中は城の内外とも石を敷きたれども別々修理とて加へざる故土地の高低甚しく爲めに貴紳等は車を用ゐずして駕籠を用ふるに常なり駕籠は竹にて編み淺黄色のペンキを塗る擔竿長さ二間許あり

床屋

内地の踏台の如き構造の台は數多の抽出ある物と山伏の負ふ笈の如き物の上に盥を載たる物とを天坪の兩端に懸けて市中を擔ぎ廻り客あれば踏台の如き物に腰を掛させ盥みて顔を洗はせ抽出去より剃刀櫛などを取り出でて髭を剃り髪を櫛づるなり



地 理 風 俗 台 灣 事 情

人力車

人力車は内地の物に異ならず只裝飾するに花鳥及人物等の巻繪を以てし現時内地の人力車の如く黒塗にはあらず即古風の裝飾ありとす之の人力車は郊外にて曳くを見ず何れも都會の市内を往復せるなり然れども道路凹凸甚しく屈折烈しきも厭はず如何に動揺するも如何に乗人の困難するも之れ等の事に頓着せず奇異ある大聲を發して行人を叱咤しながら走り行くなり

警吏(台北)

服装は普通人と同じく帽子も並の麥藁帽にて鉢巻の黒布に金字にて台北縣警吏と書き右胸部は天保銭形の銅牌にて官吏と書き内地の開港場警吏の持つ様ある長さ一尺五寸許の棒を所持せり

裸体

士人にて力役に従事するものは短き股引と麻の單衣とを着すれども

荷物を負ふ時は股引を捲り上げ單衣をば腰の邊に捲き付け一見せば裸体の如し頭には笠を被れども履物は穿かず跣足を常とす

家屋

家屋は多く石或は煉瓦より成り屋根は瓦を以て葺く二階屋亦乏きにあらず官舎及有力者の如きは恰かも本邦日光廟の如く壯觀目を眩ますばかり又巨大の門と石垣とを廻らす然れども室内に入れば案外不潔狹隘に於て粗造なり而して先づ屋内に入りて正面にあるは必ず佛壇あり美あるは本邦の堂宇の如く粗なるは卓子の如し何れも香を焚き供物を供へたり他の各室は皆土間を以て臥床の如きは終日其儘にて蚊帳の如きも取り去らず閑暇ある毎に帳中に入り阿片を喫するを最大の愉快とす

衣服

衣服は單衣に於て何れも清潔なり是れ水の多き爲め(台北府に就て言



地 理 風 俗 台 灣 事 情

へるなり履々洗濯えて着用する故土人に肖合はず潔淨の衣服を着するなり

男女状態

男女ども狡猾にして頗る懶惰なり例へば人夫を雇ふにも一荷何程との賃金を定めば一生懸命勤らくかれど一日何程にて雇入れれば一荷の荷物を擔ふて怠惰過半ブラリく仕事をなま言語に絶へしものあり而して女子は外内する事を厭ふなきは支那人と異なれども房内に至るは頗る忌み嫌ふなり  
熱帶國の主人に似合はず男女共に色白くえて肌膚美しくし外出するには男女共に傘を用ひて之を携へざる事なま婦女は朝起されば直ちに顔み白粉を塗り頭髮を梳り居るを以て髪かみの乱たる見苦ま女子はなま又少婦と老婦とを問はず悉く花簪かざしを挿ひあり老婦の簪を頭かみに挿ひは有夫の徽しるしありと云ふ

地 理 風 俗 台 灣 事 情

頭髮

頭髮は豚尾とんびなれども支那人の如くブラリくと垂れ居るものなく何れも頭上かみ又蟠かまらせ整々として秩然たるをもひきあり

腕輪

腕輪は男女に限らざ來れも美麗にして裝飾ある真鍮白銅銀製等の物を簪かんざし居るなり

食物

食物は支那内地の如く二飯にはんにあらずして本邦の如く三飯さんはんありとす副菜も支那人と比しては比較上大たい又美味の感あり然れども飯米は麥飯ばくはんにあらずして米飯こめはんなり炊米法は一旦ゆでこぼえて炊かく故少まも粘着ねんちやく氣きあぐまて本邦人の口には適せざるなり

官衙

官衙は多く壯麗なり柱壁廻廊等何れも金碧を施えて例の石垣の塙はしと



地 理 風 俗 台 灣 事 情

巨大の門を以て嚴めまく構ふあり

湯屋

湯屋は稀々清潔の趣あり沐浴去て可なり内地人の渡台せば先づ沐浴場には差支へなえ然れども鄙邊に於ては見ざる所とす

料理屋

支那風の料理にまて食ふべき物ならんが本邦人の渡台せし者は如何にも不潔千萬にまて一見嘔吐を催すの感ある故熱氣の烈まき爲め食を欲せざるあり

娼妓と藝妓

淫賣盛んに行はるゝ所にして公娼は實に稀なり而まて卅才以下は淫賣者多く卅才以上には公娼多しと又藝妓あり樂器を弄して客の招ぎに應じて至るといふ

地 理 風 俗 台 灣 事 情

◎ 台 灣 日 用 語 學

台灣語學は生蕃族と熟蕃族の居住する商業地とは全く用語を異にし商業地には多く支那人の住居する事あれば支那語を研究せたる者たらんは多くは差支へなえ然らざれば内地人にして若し渡台せし場合又は即ち筆談に若くはあしと云ふ是れ實際台灣に赴き丈量師の談話をれば此日用語學も蕃語は數十と外も語學の大略を示して讀者の記憶に存せんのみ

蕃語

山	ラフイ	川	リリオン	水	クシヤ	火	ボテク
來	レモア	去	レモハ	父	アーバー	母	アーアー
酒	クワオー	茶	アバ	雷	ングマング	雷鳴	ギルタク
電光	リカット	風	ハレ	雨	オウダル	虹霓	ハロンギンガ



地 理 風 俗 台 灣 事 情

雪	オウグラ	露	ラモグ	三	チユワン	四	ハヤ
一	コト	二	サニ	七	テト	八	ヤバ
五	マガン	六	テユ				
九	タイスー	十	ツプ				
天	デユーン	太陽	タイヤーン	日の出	ターヤーンマサゾナイ		
正午	シヤンノホー	地	デー	雲	インザ		
午前	シアンパンデーン	午後	シアンパンデーン	時計	チヨンビヤサ		
我	ウオー	机	チヨーツ	喇叭	ラアーバ		
熊	コウシユーン	庭園	ヨワンツ	一枚	イチヤン		
齒牙	ヤー	舌	シヨオウドウ	咳嗽	コオリーウ		
疲勞	フアーラ	眞實	チユンデ	井戸	チーン		
菓實	チユンクオーツ	豚	チユ	寺院	ミヤオ		

地 理 風 俗 台 灣 事 情

麵包	ミエンバオ	陸地	ハンルー	兩替店	ヂイエンア
海峽	ハーイヤラ	島嶼	ハーイターサ	米糖	ミーガン
清潔	カンチン	蒸氣車	フチーレンヂョー	會社	コンス
兄弟	ココー	弟	シヨンデー	姉	チエーチエ
姊妹	メイメイ	父	パーバ	母	ムーヂン
祖父	ツーン	祖母	ナイナイ	娘	ニユール
甥	チール	姪	チニール	兔	エーマチ
洋	ヤーン	鼠	ハツツ	蜘蛛	チチユ
乾海老	シヤーミー	猫	マナル	鴉	ラチコワ
家鴨	ヤーツ	梟	エーマチツ	虱	シイーツ
鼈	チヤーイー	狼	ラアーン	蛇鱗	ムアーンヂョン
梨	リー	桃	ドール	蜂	マーフラン



地 理 風 俗 台 灣 事 情

西瓜 シーコワ  
 部屋 ウーツ  
 河 ホー  
 牛乳 ニューナアイ  
 葡萄 ブーダ  
 只今 シエンツアイ  
 石炭 メイ  
 雉子 エーチー  
 德利 チユウビーン  
 卸 ニユーツ  
 近 チン  
 帽子 マオツ  
 鏡 チンツ  
 花 ホワル  
 夜 イエリー  
 官衙 ヤアーメン  
 休息 シエーシエー  
 號令 ホリン  
 甘味 テエーン  
 日傘 バンサアーン  
 牢屋 ラチイー  
 深 シエン  
 指 チイード  
 暑熱 アツイ  
 狐 ホーリー  
 蟻 マーイー  
 薪 チアーフラ  
 恩 エン  
 返信 ホイマン  
 針 チエン  
 朝飯 ツアオーファン  
 銀行 インハーン  
 鼻 ビーツ  
 圖書 ホワアール  
 聲音 シアーンル  
 砂糖 ハイターン  
 墨 モオー  
 蠟燭 ラアー  
 不潔 プカンチン

地 理 風 俗 台 灣 事 情

血 チユエー  
 烟草 イエン  
 瘦 シヨウ  
 鴉片 ヤーンヤオ  
 一 イー  
 四 スー  
 七 デ  
 十 シー  
 靴 シエー  
 晚 ワーンシアン  
 虎 ラチホー  
 私 ウオー  
 肉 ロウ  
 斥候 タママア  
 紙 チー  
 地震 デイトン  
 陶器 ヲウチー  
 二 アル  
 五 ウー  
 八 パー  
 航取トオーコン  
 湖 ホー  
 霧 ウー  
 釘 テインツ  
 匙 チーツ  
 苦味 クー  
 砲兵 ハオトイ  
 紅茶 ホーンヂヤト  
 足袋 ウアーツ  
 砲台 パオダイ  
 三 サン  
 六 リウ  
 九 チイウ  
 馬 マー  
 雨 イー  
 腰 ヤチ  
 石油 メイエー  
 伏兵 マイフウ  
 卷 ハチ



地 理 風 俗 台 灣 事 情

多數	ト	銃前	ソ	糧	リヤアーシー
飽	パチツ	廟弄	ウーノン	勉強	ヨンヨン
頭痛	ドードン	釣銭	チャーチゼーン	兵營	ピンフワン
下女	チチボーツ	汝	ニー	山	シヤン
破壞	ホワイ	手拭	シヨーチン	飯米	ファン
細微	シー	小	シヤチ	飲水	ホー
退去せよ	ドーガイ	糠	ミーガン	厨室	チユーファン
薄	シーラ	燒	シヤチ	蓆	シートツ
眼鏡	イエーンチン	耳	アールトチ	吳服屋	チヨウトワツプ
生垣	リーパ	厘	リー	露營	ルーイーン
一里	リー	銳利	グウイ	齒科醫	ヤータイフ
墨壺	モーボール	美人	ビヤチチ	釣瓶	テアチトン
船に酔	インシヨワン				

地 理 風 俗 台 灣 事 情

内地人の台湾に渡航して工業或は商業を開かんとするものは是非共台湾語なるものを知らざれば能わざるかといふに決して左にあらす台湾の眞の土番語と市街地に於ける日用語とは全く相違したるものとて基隆台北等台湾中にも人家稠密人口繁殖せる都會に於ては支那人多を占れ其他外國人入り込み居るものあれば決て台湾語に通せざるも左程の不便は感せざるとかん且新に我版圖に歸し之れより益々我内地の人民は渡航して本邦人は必ずや他日は日本語を彼等に學ばせむるに至らん又内地に於ても見すや言語の相違に於ては北國人の來りて東京人と談す了解せざる箇所多又京都はあれ大坂にあれ鹿児島はあれ方言は各異なるものなり然れば仮令台湾語學の二三を爰に掲ぐるも又讀者に向つて利便を與ふる事は實に僅少なりといふも可あらん何とされば前述の如く言語は其處々依りて所謂訛りあるものありて異なればなり殊に台湾の如き種々雑多の人種入



地 理 風 俗 台 灣 事 情

り込みて我も我もと利を競ひつゝ商業を居るの土地に於てかや左れば台湾遊歴者の語る所を聞くに前にも陳べし如く筆談に若くは亦何とされば是等都會の人民は多少文字も解せるからん殊には支那の所謂漢字は已に我國古來より學びし處あるを以て發音の相違あるも意味の相違は余りなきものなれば多少の語學を學ぶよりも寧ろ筆談又熟するに若かずと語れり又嘗て一市街に於て物品を購はんをせし事ありきと然るに彼れ商人は例の支那人の風故筆談を以てせんかど欲せしが不圖思ひ付きて英語を以て物品を購求したき由を述べり彼れ直ち又是れに應答片言ながらも英語を以て物價の如何を談せりといふ今や英語は世界萬國商業地に於て通せざるもの稀なれば商業社會の人は英語をも心得居りて筆談をよくせば中々土蕃台灣日用の語學を學びて即席の學者となり渡航するよりも遙か又得る事萬々なりと言へり依りて記して讀者の参考に供するあり

◎ 台 灣 一 般

單騎遠征より引き續きて清韓の野に轉戦し茲に征台又當つて樺山總督に從て出馬せる福島大佐は一旦歸朝せしが今大佐の實地目撃の談話あれば掲げて讀者の一餐に供せん

運 輸

台湾全島一徑の道路を通せず從て荷車もなく駄馬もあらず一人肩に依頼して運搬する次第あるを以て我軍の進撃に際してや其困難實又名狀すべからず

例へば一万の兵には一日米六十石を要之れに味噌醬油罐詰等の副食物を加ふる時は其重量百石の上に出づ可之而て人夫一人の荷擔力は平均二斗に過ぎざれば百米を送るには五百人を要之又一人の運搬里程は五里を通常と之兵站線は凡る五里毎に之れを繼ぐ

地 理 風 俗 台 灣 事 情



地理風俗台灣事情

の制なるを以て若し廿五里の遠さよ送るには五ヶ所にて継ぎ則ち五人継ぎある故全体にては二百五十人の人夫を要する次第なり

航海

台湾近流は夏期の半頃より西南の風強く海上殊に危険なるを以て船の航行自由ならざる爲め糧食彈藥の如きも矢張り台北に陸揚然る後台北より南敵の根據地までは七十余里を隔て而かも道遠き荆棘の中を往く困難益々尋常よわらざるなり

食料品

台湾全島は米を産する事甚だ多し北部にては二作を收め南部に到つては三作の収獲あり又沿道の田畑には野菜多く少まも不自由を感せず但し肉類に至ては甚だ乏しく豚の外は鶏卵位なり牛は水牛の外はあらず

言語

台湾の土民は大抵支那南部厦門福建邊の人民あるを以て滿州地方の言語は毫も通せず通譯官は總て用をなさず僅に土民中文字を解する者を捕らへ筆談よて用を便し居る有様なり

土民

支那朝鮮人は概して日本人に比すれば体格長大よまて其膂力も從て強く日本人の荷擔力は通常二斗許なれど台湾の土民は朝鮮人又は支那人の如く三斗位の荷擔力を有せり

土地

台湾全島土地甚だ膏腴にして加ふるに氣候溫和植物繁茂して鬱蒼たるの状は到底北清地方等よては見るを得べからざるのみならず内地に於ても稀に見る所なり而して其面積は我九州よりも大に人口は三百萬餘に過ぎず實に南境の富源たり今後盛に内地の人民を移殖新に事業を振興せば其利豈鮮小ならん

地理風俗台灣事情



地 理 風 俗 台 灣 事 情

台湾現在の事情を明細に記したる近信ありといふを得て之れを一讀するに頗る精細の取調べなるを以て記載去て讀者に示す  
台湾は豫想外に農商業進歩の地にして台北近傍廿里内外に水田蒼々として山には松樹を植付け或は茶を植付け開墾尽して寸地を余さざるが如し殊に田の植付方は出羽奥州の植付方に優り恰かも九州筑後地方を過ぐるが如く其稻の植付方の整然たるには驚入候未だ南方を一見せずと雖台中台南皆能く開け水田茶畑砂糖園等所に有之未だ開墾せざるの地は唯蕃族の区域内に在るのみ山師連中が此地入り込むも商業は固より支那人に及ばず農業は已に達發居るを以て又手を出し事能はざる可し台北は戸數二万人口廿萬余家屋は皆煉化石造りて市街の道巾も多くは三四間以上格別不潔なるにもあらず

◎ 現在の事情

地 理 風 俗 台 灣 事 情

又た外國人も數多居住居り其居留地の如きは茶の製造盛んなるを以て最も繁榮なり毎年淡水のみにて即ち台北より出す茶の關稅のみにて一百万兩内外の収入あり台北城内外の官衙數多あり皆建築宏大にして一官衙二町四方の建築なり總督を始め小生等の入り込み居り候家も二町四方の建築にして一行二三百人住居し居り候惜むらくは支那流の建築あるを以て多數の人を容るゝに不便なり若し家の内普請を日本風と改造したらんには一官衙五六千人を容るゝも亦易々たるべし或は秋冬風雨の恐あるを以て家の建築方又注意せしものによ未だ其時季を経ざるを以て其築建方の原因を知るに由無し(中略)然れども戦争已止みたるの地には電信を架設し鐵道を布設去港灣を調査道路を開墾するは最急務あるを以て電信は從來の分は賊の爲めに既に切り棄てられたるを以て更に架設に従事せざるも鐵道は從來の分不取敢修繕に着手したり道路を開き港灣を調査するには土木の技



地理風俗台灣事情

師必要あるを以て技師十數人内務省に請求し又土方等を内地に募集せよめたり

台南は昔々鄭成功の開きし都府にまて城廓市街共に堅牢の建物にまて却て台北は優る處ありと云ふ此地には右に安平といふ開港場を控へ砂糖輸出の尤り繁昌の地なり關稅の收入毎年八九十萬圓なり從來廈門等に輸出するには無稅あるべきも今後有稅となるときは又其收入多額に至るべき承承如の通り台灣は植物に富むのみならず鐵山あり田畑の收入の意外に多くして地租も將來は從來の正稅のみとするも人民に喜ばしめつゝ多額の稅を收入する方法あるべく實に我帝國は南方に一大富源を占領したるものと謂ふ可也唯惜む匪徒今尙各處にありて人民を煽動え種々日本を疑はしむるは殘念に付速に撲滅し度く熱望の至りに涉座い

◎實業問答

台灣は將來實業上有望の土地ある事は衆目の認むる所のみならず今や益々發達を遂つゝあるなり此頃富山縣前代議士關野善次郎君台灣の實業上よ就き大に觀察する處あり左に記載する問答は全代議士歸朝して後毎日新聞社員の訪問したる當時の問答記となす他日台灣島に事業を起さんとする者の爲めには大に裨益する處あるを以て茲に掲載するものなり

問 渡台後第一に訪ふしは何處ぞ

答 渡台後余が第一に訪ふは基隆附近の金包里と稱する處あり此の處琉黃を産す今探掘に従事し居るは大礮嘴油礮坑の二とす然れども琉坑極めて小にまて一年の掘探高百石に達せずたとひ土民の事業とは云へ將來望を屬するに足らざるなり

地理風俗台灣事情



地 理 風 俗 台 灣 事 情

問 答

石炭事業の現況は如何

台湾に於ける石炭事業は稍々望を屬するに足るものあるが如き而して現時基隆附近掘採に従事し居る處は八斛と稱する處に於て炭坑は二ヶ處あり其一方は各坑とも石炭の積層三尺に達し坑口の如きも頗る大に於て之れが掘採には常に大人從事し居れり故に大人坑の名あり然るに其一方に至ては石炭の積層僅に一尺余に過ぎず坑口も亦小に小人をして掘採に従事せしむるを以て人喚んで小人坑とは稱せり炭質はまづ中位に於て掘採高も甚だ多く掘採せしむるは悉く之れを基隆に運搬し此處より初て各外國へ輸出せられ居るなり然れども掘採所則ち炭坑處在地と基隆の間は未だレールの敷設もなく石炭の運搬はすべて人肩馬背に據るの有様なるを以て其不便謂ふ可からず

地 理 風 俗 台 灣 事 情

問 答

金銀坑は之れ亦きや

殊に採掘の方法たる極めて不規律疎雑あるものにて同島に於て將來此業を計營せんと欲するものは第一に之れが掘採方法の改良を要するあり余は南部の事情は之れを詳にせず唯だ余が歴見せし北部に於ては基隆の東南數ヶ處に金坑の在存するを聞けり何れも基隆を距る遠きも五里を超へず近きは三里を過ぎざる處にありまた其源を三貂嶺より發し一瀉十里水返脚に達する某川の河岸には多くの砂金を産せり此砂金採取に就ては清政府は砂金局あるものを設置し採取者又對して人頭税を課せ來れり而して其人頭税は塲所又依て等級を附し或は十錢を課せ或は十五錢を課せりといへり

基隆附近の農況は如何



地 理 風 俗 台 灣 事 情

答

余は基隆より發去台北に至る間に至て水田の多きには一驚を喫したり殊に驚きたるは水利の便甚だ大あるの一事又在りとす是等も畢竟山林健在の結果たるべし  
また米作は一年二作に於て初期の植付は三月中旬より四月上旬に於てし、蒔取は六月中旬より七月中旬に掛けて之を行ひ二期の植付は六月中旬より七月上旬に於て之蒔取は十月下旬より十一月月上旬に掛けて之を行ふといへり(編者曰く南部の地方に至りては三作ありといふ)  
借又租税に至ては一甲(日本の二千六百坪余)に付上田二兩肆錢捌分肆厘捌毫捌絲中田二兩金一錢捌分令捌毫捌絲下田一兩陸錢陸分肆厘肆毫肆絲忽下々田一兩三錢三分伍厘陸毫なり又一甲一年の收穫は玄米に引直去上田廿石前後中田以下上田より各凡二割減と見ば大差ある可し而て其買買價格は一甲上田千二百圓中

地 理 風 俗 台 灣 事 情

問

田千圓下田八百位ありと云へり

答

茶は如何  
茶は同島輸物中重なるもの一たり一年の輸出高四五百万圓の上に出づと云ふ而て其輸出先は多く米英兩國に於て其他はすべて本國支那内地ありとす上等百斤の價は八十圓下等は二十八圓位なりと云へり

茶の精製は悉く台北に於て之を營み大なる製造所を設け英人多く其商權を掌握去居るが如去然れども亦競争の余地なきにあらず

問

日本の産物として輸入せられ居るものを見ざりしや

答

見たり然れども誠に寥々寂莫たるものあり今其一二を擧ぐれば木綿のしゝら織の如き紀州若くは會津産と覺ば去益の如き茶碗の如き海産物に於ては鯛の如き蝦の干去たるものゝ如き鮫の



地 理 風 俗 台 灣 事 情

鹽の如き海鼠の如き是れなり偶々又日本の俳優の寫真等も見ざるに非ず

今の時に當つて雜貨を同島に輸入せば必らず幾分の利あるべし然れども余は何れの物品が我土民の嗜好に適し需要を充たそに足るやは今又於て斷言する能はざるなり

問

台灣土民の貧富如何

富豪朱頓を凌ぐの輩あるを聞かず然れども土民は概して富有なるが如し其は基隆にても台北にても淡水にても到處浮浪無宿の徒少きを以て知るを得警察制度の全備せざる行政事務の乱雜ある彼れ台灣の如くよまて猶且つ浮浪無宿の徒を視ざる斯の如し是れ土民が一般に富有にして從て購買力に富むの証ならずや台灣内地の商業亦盛さきよあらざるなり

問

家禽事業は行はれざるか

答

行はるゝなり宜蘭地方最も盛大を極むと云へり惜哉充分の金を有せず精細の調査は之を就し遂ぐる事能はざりき

問

地味は如何

樹林の鬱蒼たる菓穀の穰々たる間すえて地味の膏腴なるを知るよ足る台灣全其沃野千里茫々漠々とて眼睥際涯を見ず余は一見其好領土を得たるを狂喜せり

問

台灣の度量衡は如何

土賦賦定後行政事務の一とて第一に決行せざる可からざる處の者は度量衡改正の一事あり同島の尺は我曲尺より七分五厘方短小よ升は彼の一斗は我の五升六合程に當り居れり又秤に至ては種々ありと雖其重なるものを擧ぐれば海關秤(海關税の査収の時用ゆ)庫平秤(諸官衙にて用ゆ)街市秤(商賈百般の取引に用ゆ)の三なるが如し

地 理 風 俗 台 灣 事 情



地 理 風 俗 台 灣 事 情

問

基隆と淡水何れが繁榮あるや

余を以て見るも台湾南部商業の中心点は正に台北に在りと言はんと欲するなり此他基隆の如き淡水の如き二ツながら一の輸出港に過ぎざるのみ台北の繁盛や蓋々想ひ知るべし故に淡水と雖基隆と雖其繁盛の点又於ては共々台北の次位に在り而て又基隆は淡水に較ぶ稍々衰色あり基隆の輸物唯夫石炭の一あるのみ

問

台湾を北海道に比す如何

我邦を以てすれば台湾は南海の寶庫にして北海道は北海の寶庫あり共に寶庫たるも相違あま然れども進歩の情態に至ては大に趣を異にするものあり北海道は未だ半開の土なり台湾は既に全開の地たり北海道に於ては尙ほ未だ拓く可きの土地と起す可きの事業とに乏しからず台湾に在つては既に業に拓く可きの土地

地 理 風 俗 台 灣 事 情

問

戦後に於ける土民の情態は如何

余が初め訪ふに其時は基隆も台北も日本兵の襲來に驚懼を東西に遁匿せし徒がソコ歸來するの時あり然るに歸途訪ふに其時は全市既に兵馬を以て充溢す市氏は殆ど空虚の姿とあり居たり

問

台湾の土民は馭ま得るの土民あるや

女子と小人は養ひ難しと古哲の金言吾人を認ひす空島土民の馭し難き實に言語を絶せり故に余は土賊戡定後の平和策として彼



地 理 風 俗 台 灣 事 情

七十四  
土民又對えては斷乎たる處措を施さんと欲するあり  
終に隨て余は一言す同島の土賦にして裁定せば直ちに誠篤着實  
信用あるの實業家を彼地又派し茶業なり糖業なり其他礦業なり  
一躍經營企畫する處あらまめ速み其實權をえて本國實業家の掌  
裡に歸せんとん事切望に堪へず

◎ 貿易談

台灣島は天然の產出物に富み就中樟腦砂糖茶葉等は屈指の物産にま  
て輸出品の最なるものとす其他礦物植物等の富有ある事全島を揚げ  
て然り去らば後來商業貿易上頗る望ある良地なれば我本邦の實業家  
は正に奮つて斯業に従事す以て發達を圖らざるべからず即ち將來の  
參考に供せん爲め台南府駐在の英國領事ハルスト氏の台灣貿易の報  
告書を秀穂君の翻譯せられたるあり即ち之れを掲げて志士の注意を

地 理 風 俗 台 灣 事 情

喚起するの一助に供せんとす  
千八百九十四年(明治廿七年)に於ける砂糖の産額は毎年の平均より著  
く増進し千八百九十三年に於ては六十万七千四百十六(ハンドレットウエ  
イト)に過ぎざりしが九十四年に於ては八十七万五千七百八十七(ハン  
ドレットウエイト)を外國船にて輸出せり台灣貿易總額の昨年(明治廿七  
年)に於て著しく増進せしは主とて此砂糖の増加による砂糖の賣買  
は一月に始まり六月の終りに於ては全く積出を了りたり通例打狗  
砂糖は日本に輸出せられ台南府の砂糖は上海天津及支那北部に輸送  
せらる打狗黒砂糖の昨年平均直段は二(ハンドレットウエイト)に付六志  
四片台南府黒砂糖最上等品七志二片二等品六志五片台南白砂糖十四  
志十片ありき今年(廿八年)の砂糖収獲は昨年よりも尙好況あるが上に  
同島政治上の紛擾を畏れて外商は何れも大に積出を急ぎたり  
樟腦業も亦昨年充分満足ある發達を爲したり即ち千八百九十三年に



地 理 風 俗 台 灣 事 情

於ては千五百三十「ハンドレットウエート」なり去が昨年は一萬三千九百七十一「ハンドレットウエート」に登り八割五分の増進を示せり次表は支那政府獨占權の廢止以來如何に此業が長足の進歩をなせ去かを示す  
又余りあらん

千八百九十年より千八百九十四年に至る

樟腦輸出額

千八百九十年 九〇四「ハンドレットウエート」

千八百九十一年 二、五二四

千八百九十二年 五、四四一

千八百九十三年 七、五三〇

千八百九十四年 一三、九七一

昨年一月より七月頃に至るまでは樟腦の價格は低廉にして七月の終り香港市場に於ては「ハンドレットウエート」は付僅かに三磅二志あり

地 理 風 俗 台 灣 事 情

しが八月に於ては日清の間に戰爭ありて市場に恐慌起りしを以て一時は五磅十志の高價に上れり是即ち台灣の諸港封鎖せらるゝならんとの説専ら香港外商の間に行はれ去を以てなり

然れども幾くも去く去て市價は平準又歸し昨年の終りに至るまで平均四磅にて繼續せり故に昨年樟腦貿易は其業に従事せしもの爲に利益あり去事疑を容れず昨年間英國商人の新に出店せしもの二軒あり去を以て今日台灣に於て樟腦貿易に従事する外商は都合五軒内英商四獨逸商一なりと近年又於てチャンリンピンのアンタオホー及び嘉義縣に新に樟林を開きたり昨春嘉義縣の地方官検査便なりとの口實を以て海岸又樟腦を輸送する外人にして殊更に遠路を迂廻せしめ依て以て多くの通行税を徴せん事を企てしる外商は直ち之れを道台に哀願せ去を以て其事なく去て止むを得たり外商は自ら其擇ぶ所の道路によりて貨物を運搬するを得べき事は既に前領事ウオレン



地理風俗台灣事情

氏の尽力に依りて認定せられたる所なり内地に於て製造せられたる樟腦は海岸迄運送するには其所々於て通行税を徴せらるゝ事なるが千八百九十三年に於ては其箇所五十七なりしが千八百九十四年に於ては七十一箇所に増加したり  
最も良き樟樹林は重に生蕃の住居せる地方にありて支那人夫が木を伐り倒し樟腦を製造する際屢々生蕃の爲め攻撃せらるゝ事あり樟腦業は斯くの如き危険あるを以て支那政府は保護兵を置くの必要を感ぜ其費用とて「フアンフエ」と稱する一種の税を課せたり然るに近來海岸防禦の急要より支那政府は製腦地方に於て缺く可からざる是等の保護兵を漸次引上げたり斯く保護兵を引上げたるも拘らず税は依然とて之を徴せしを以て外商は此有名無實の保護料を拂ふ事に就て皆不平を抱けり近頃土蕃の暴動チップ、チップの地方に於けるバキヤラン及びカトーカに起りては樟腦製作所は爲に

地理風俗台灣事情

台灣商業一般

破壊せられ人夫は殺害せられたるも土蕃は一も刑罰を蒙らざりき  
過去數年間台南府商業の形跡を追想せば實に嗟嘆の外なし台灣島天然の利源は生産事業の好運を充分保護せるにも拘らず其實況は全く之れを反せり台灣は世人の既に知るが如く其地味甚だ豊饒にして且礦物も富み茶樟腦砂糖米麻藍煙草カシヤ、シサマ、硫黄、蔴子、油、落花生等の植物を産出せ且其地味綿、珈琲、及び阿片の耕作に適す米の産出の饒多なるも其質品の良好あるとは一時台灣をして支那の穀庫たらしめたり今年に於ては數多の軍隊防禦の爲め支那本土より此地に來りしを以て兵站上の必要よりして穀物の輸出は嚴禁せられたるも其實ヤンク船によりて密輸出せらるゝもの續々跡を絶たざるの有様あり  
台灣は又石炭、石油、硫黄に富み且金の鑛及び銀鑛を有す然れども台灣南部地方に於ては今日迄未だ何等の企圖をもなまざるものなし此程



地 理 風 俗 台 灣 事 情

の事業に對する計圖は總て停止の有様にあり  
故に台灣商業不振の原因は決して天然富源の缺乏にあらずして全  
生産原動力の缺乏にあり又他の原因は課税の苛重なる事是あり千  
八百八十六年迄は支那政府の政略は此人口稀薄なる新開地の商業を  
奨励するが爲め課税を軽く支那内地に於て行はるゝ如き諸程の税  
を全く免除せしが同年より於て台灣は福建省の一屬隸地より一轉て  
獨立の一省となりたるを以て毎年支那政府より補助を仰ぎ來れる七  
万五千兩の保護金を失ふに至れり故に之れを補充する爲め總ての輸  
出品に對て輸出税を徵するが上より更に一種の國産税を課するに至  
り是即ち輸出釐金税として人の知る所に於て商業不振の一原因か  
り人口の増進も亦之等の苛税の爲めに大に阻害せられ劣等の土民は  
之れを耕作するも到底依て以て自活の道を得る能はざるに至れり  
商業發達の他の障害は完全なる良港のなきこと及び内地道路の不良

地 理 風 俗 台 灣 事 情

なるが爲め運送上非常の困難を感ずる事是あり良港の缺乏に對する  
救済の策は容易の事のみ打狗の附近に一の湖あり長サ七哩巾一哩に  
して其間只珊瑚より成れる一小岬に依つて海と分たれる故に此湖を浚  
ひ上げ良好なる港灣に變更せん事は容易の事に於て且決して多額の  
費用を要する事に非らず然るは支那政府は四五年前より此處を測量せ  
しめ之のみよて其計圖を進捗するの意思更になきものゝ如し今日と  
雖ども十一尺の吃水を有する船此湖に入る事を得然りと雖淺洲も乗  
り上るの危険を免るゝ爲め水先案内を備はざるべからず砂糖積込の  
爲め大船常に此沖に碇泊するも船積陸揚共々屢々天候の爲めに阻害  
せらる安平港も事態亦殆んど之と同一に於て大船は海岸より二哩許  
隔つる外洋に碇泊し荷積陸揚共に荷船によつて之をなす此荷船は沙  
原を蜿蜒せる二條の水路の一つによりて以て陸地と本船との交通を  
かす陸地との交通は只此等の水路によるの外なしと雖是とて甚だ



地 理 風 俗 台 灣 事 情

淺水なり且つ此水流入るには先づ淺瀬を超えざるべからず天候險悪ある時は怒濤此洲を押上るを以て數日の間全く通行するを得ざる事あり冬季或る日干潮の時水の深さ僅に二尺滿潮に於て四尺に過ぎざりし事あり故に荷船を曳く爲に用ゆる小蒸氣船と雖時としては滿潮の時に非らざれば此所を経過する事ははざりし事あり前記の如き時情なるを以て浚ひ上げの必要は人の屢口にする所なれど未だ嘗て實行せられし事な之を要するに是等地勢改良の行はれざる事及生産事業の困難なることと課税の苛重なる事等を考へ來らば台灣商業發達の遅々たる何ぞ怪しむに足らん

地 理 風 俗 台 灣 事 情

「ジャンク」船にて輸出する分と對しては外國船にて輸出する分より低廉なる税率を課す而して支那船の運送に係はるものは輸入に於ては時として全く關稅をも免るゝ事あり輸出に於ては外國船輸出品に課する三分の一を徵するのみ南部台灣に於ては輸入品(阿片を除く)に對ては一も釐金税を課せず樟腦の輸出釐金税は通行税の内へ包含して積出港に於て拂込むを常とす其税金は海關稅の半に於て二ハンドレットウエートに付一志ありとぞ砂糖の釐金税は黑砂糖二ハンドレットウエートに付二片白砂糖四片とす通行税は砂糖に對ては一も徵收せざるあり

◎ 製糖業の現況

台灣より輸出する砂糖は其總額一千万圓以上なるが我國にては砂糖の需要實に多額にして島内も生産する砂糖の全額を悉く内地へ輸入



地 理 風 俗 台 灣 事 情

するも尙ほ不足を生じて外國の輸入を仰がざるべからず故を以て我  
本邦人の計畫を以て製糖會社を起す以て内地の需要を充さめんとす  
るが實際に至ては一條の困難前途を横はり居るなり今台灣事情に委  
しき實業家の語る所を聞くに全体台灣は打狗及安平地方より出るも  
のにして製糖會社を起すには原料糖を右等の地方より買收せざる可  
らず然るも目今の状態は打狗安平の原料糖は悉く順和號なる支那商  
人の手を経て香港のシャーペン、マツソン(義和洋行)并にパタフィー  
ロスワヤ(大古洋行)の二商會に買收せられ古二商會の手により精製せ  
られ始めて日本其他に輸出せらるゝあり扱右二商會が耕作地より原  
料糖を得る方法如何と云ふに右二商會より巨額の資金を卸す之を其  
代理店なる順和號に依りて各耕作主に前貸するあり其方法恰かも  
横濱の生糸仲買商が内地の製糸家に資本を卸すに等し故に打狗安平  
の耕作主は右二商會の爲めには如何様にも左右せらるべし左れば日

地 理 風 俗 台 灣 事 情

本の紳商が製糖會社を起すとすも原料糖の買收權は悉く香港の二  
商會に歸し兵力上台灣を征え取り乍ら其主要の産物たる砂糖の利益  
は相變らず香港の英人等に歸するなるべし而して日本の商人に向つ  
て右香港の二商會と全力競争を爲せよと云ふは勢ひ行ひ得べからざ  
る所なるべし扱右等の困難あるも扱らず土地所有權の一より至りては  
甚だ粗略を極えたるものにして香港の二三商會より土地の所有者よ  
非ざるのみならず耕作主あるものも適法に之を所有し居るや否や疑  
ひなき能はず結局耕作主は幾許の地所を所有すると云ふとなく殆ん  
ど何人の所有と云ふ名義もなき地所に甘蔗を植へ付け之を耕作して  
順和號より賣り付くるあり現に朝鮮の如きは家を賣買すれば地所は其  
家に附屬する由なれば台灣の如き未開地に在りては耕作物に地所  
を附屬せざる如き奇觀もあしとは云ひ難し就ては此際台灣總督府  
に希望するは右地所の所有權を明確にし從來何人も適法に所有せざ



地 理 風 俗 台 灣 事 情

る以上は總て官有地とあすか内地人に拂ひ下ぐるか總督府に於てぬ  
かりあきは勿論あるべけれども万一にも耕作地の地有權が右香港の  
二三商會若しくは順和號の手に落つる事あらば打狗安平の地方は日  
本領といふは名のみにて長く其利益を英清人に吸ち取らるべし尤  
も彼の耕作主に所有權を持たせればとて其の實際は順和號及び香  
港の二商會が所有する事となるべしと語れり左れば製糖事業は現況  
に徴して將來中に困難ある事あらん然れども内地商人の協力一致と  
計畫の宜まきを得ば他日實權を内地商人の手に收むるならん

◎ 颶 風 の 時 期

台灣近海の颶風は實に我が征台の軍をさまたげしのみならず後來交  
通往復繁多ならんとするに際し我海運の便を妨ぐるなれば其性質と  
其時期を知るも亦必要ならん

元來支那海の颶風には四種ありて

第一「バラツンの北に起り海南島若しくは其南を過ぎ其吹續間即ち

初發より最終迄各地經過の通計時間は五六日間あり

第二最も多くして線路も亦遠きに達するものにて呂宋近傍に起

り其西北の支那大陸に入り變反えて上海芝罘間より朝鮮を

衝き或は台灣海峡を通過えて北東に變反し日本を衝く此風

は八九兩月に最も多く其吹續は通例七日間なるも或は五日

間又えて止み或は十五日間に渉る事あり

第三其吹源台灣の東にありて是より變反えて屢々日本の南方海

濱を拂ふ其吹續は三日七日若しくは十二日間とす而て此風は

第一種の風少なき年に最も多し

第四通常東方より呂宋若しくは其南方を横ぎりて過ぐるものにて

此れは低緯度より起り風域狭く吹續僅か二日間許り又過

地 理 風 俗 台 灣 事 情



地 理 風 俗 台 灣 事 情

きすといふ  
而して從來各月に起る颶風の總數を百と仮定して之を各月に配當すれば實に左の如き

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
二	〇	二	二	五	五	十四	十九	廿七	十六

地 理 風 俗 台 灣 事 情

之れより由りて見る時は十月より七月に至る四ヶ月間は最も颶風多し  
 (我が南征軍は實に此最危険の時期に向ひたるものなれば澎湖島を占領しながら今日まで隊を南進せしむるは止を得ざるあり而して今九月は實に其颶風最も多き時期に屬す然らば我艦隊及び御用船が船體相觸みて台湾の南部に進むる數十日の後即ち秋高馬肥ゆるの時を待たざる可からざるか)又聞く支那海より台湾海峡に向ふて襲來する颶風は甚だ危険なるも殊に其前兆なき時は更な危険なり而して台湾海峡又は朝鮮海峡の如き廣き海峡に向つて進む颶風は反對強風の抵抗の爲め屢々其中心路を北西方に變ずる事あり故に斯の如き抵抗は高山脈よりも却て其効力大なるものありといふ

十一月  
十二月

八  
三



◎基隆葬儀の話

台湾の風俗は前に述べたが茲に面白き一話あり之を記さんに基隆港に於て死者ありたる時は書簡を以て親戚知己へ報知をなす所謂泣き女を雇へば其女は下に白衣を纏ひ上に蚊帳の如き粗き地の茶色なる布を被り頭及面部を掩ふ市中を練り行き土語を以て哭して何町何番地の誰何日何時死亡せり誠に悲しき次第なり云々と終日泣き廻り以て訃音の知らせに代へ貧家は一人富家は數人を雇ふなり而して泣き女には一升泣き三升泣き等の階級ありて貨銀は其技倆に依て異なりと云ふ又死者を容るゝ椁は丸木をくり切りて死体を容るゝ様作り薦を以て之れを包み大繩にてぐるぐると巻き付くるなりと又死者の門出には先づ門前に棺を安置去靈前には豚の頭の丸煮を大皿に盛り其頭上は尾を備ふ富者は一匹の豚を丸煮に於て供ふるあれども貧家は只頭と尾とを以て全部を代表するの心組みなりと而して米及び豆を煎りたるを供へ豚尾の禪僧讀經きて銅鑼を叩き棺の周圍を環り歩き終れば之を送り出そなり又土葬と露葬あり死者の永眠すべき墳墓は基隆市の傍を流るゝ大河中に在る大なる島にて土葬は彼の棺を土中に埋め露葬は之を埋めずて其儘島上に置き風雨に曝し數月を経てのちに風雨の爲先白骨とあるを以て瓶に持行き白骨を収め島中の峨々たる岩石たる間に安置する由あり

◎大毒蟲蠍子の話

台湾島には蠍子と稱する一種の猛烈なる大毒虫あり此蟲は形狀蟹に似て尾あり尾端に鋭利なる毒刺を有え多く乾きたる地古屋の中外壁の下或は樹木の根及其空洞等に潜臥容易く人を害す人若し其害を受くれば直ちに甚しき疼痛を起す時としては殆んど不治の傷となる



地 理 風 俗 台 灣 事 情

ことあり而して其毒質の猛激あるは六月より八月頃に至る交尾時期にありて害毒の最も甚しきは灰色のものなるが該島に駐在せらるる將校兵士中にも此毒蟲の刺衝に觸れ不測の危害に罹るもの間々あり而して此治療方法如何と云ふに若くは過て此蟲に刺されたる時は直ちに醫師の指揮を乞ひアンモニア精を以て其傷所を摩擦し紐にて傷の上部を軽く縛り龍腦精龍腦を焼酎に溶解せしもの五滴乃至十滴を服用するは又はブランデー其他酒の如き興奮劑を少々多量に服用するも可なり又其傷所は阿片を塗り置くときは自然に其毒の蔓延するを防止堅く腫れ上りたる後よて切斷するも可なりとす

◎澎湖島

地 形

澎湖島は大小の島嶼二十一より成り立ちしものにて群島中澎湖島を

地 理 風 俗 台 灣 事 情

もつて主島とし次いで西北にある澎湖島と云ひ北にありしものを白沙島と云ふ北緯二十三度十二分半に起り二十三度十七分半に至り東經百十九度十六分より百十九度四十分に至る地質は鎔化石あるを以て概して平坦あり而して樹木の成長せしものなく雜草等は殆んど見ざる事能はざるなり只植物にて目に觸るものは玉蜀黍落花生馬鈴薯薩摩芋の類のみにして熱帯地方の穀禾となすものなり此島は地理學有名の形勝地にして清佛戰爭の際の如きも佛將クルーペー海軍を帥ひて同島を扼して以て根據の地となす實に地利の勝を占めたり

氣 候

氣候は實に不順として天氣快晴ある時は頗る熱度を高め九十五六度は昇降すれども一度雨を帯びて來れば忽ち涼氣を催し五十度以下降するなり故を以て斯る激變の氣候は惡疫流行の媒介となり本邦人の此地に至る物は多くは之れに胃かざる殊に飲料水の乏しきは困難の



地 理 風 俗 台 灣 事 情

一事なりとす之れが爲先に已むく悪水に濁を醫する事屢々ありと  
今本邦人の同島に上陸して如何に虎病の爲め又惱まされたるかは  
同島よりの一通信者に依りて知るを得べし即ち之れを摘載せん  
(前略)前便もや上り通地は戦争も案外早く片付き加之他に觀察  
すべき價値なき土地に似へば便船次第同袂を連れて歸朝の事約  
束致し處前便通信中にも一寸や上り通地虎列拉病遠征軍の當船中  
にありし當時より我を苦め實に云ふに堪へざる有様のよきあり  
まが上陸後氣候の激變と食物の悪まきとにより軍夫兵士等頗る感  
染既に〇〇の遠征軍中〇〇を失ひや一日數百の患者一度又發  
生致し直ちに斃るゝもの又百を以て數ふ軍醫醫され看護手斃れ死屍  
は患者と堆積ま何とも手を扱するより外なき慘況に陥りやい處艦  
隊より一團の看護手を上陸せまめ天幕造りの避病院を作るやら漸  
く一通りの手順相整すい尤も慘害を逞ふしたるは去二十七廿八年

地 理 風 俗 台 灣 事 情

三月二十八二十九日頃に御座候其實況は見ぬ人は誠に思はれぬ様  
に御座候小生等一行も粗悪の食物不潔の室萬事不十分ながら相  
戒めて十分注意致居り候へども案外にも報知社の敵島氏第二に襲  
來を受け避病院に参り申候其翌々日小生も亦不幸なる此仲間入を  
致候擔架に載せられ人夫に引かれて何處とも知らぬ避病院の中に  
夜中連れ行かれ申候當時は尤も激しかりし折りどて何方向さても  
人の頭呻吟の聲遠近に聞ゆる慘狀之れ予此世の最期かと思ひなが  
らも人間は斯くばかり淺墓又死するものにあらず我爲めの好墓田  
はコンナ下らぬ處にあらずと自信罷在候へ共入院後の四五日は全  
く夢中みて今より想像する事出来不申候然か天幸に小生を憐み  
てか段々紙を剝ぐが如く病勢は薄らき其中看護の手も行届き快方  
に赴く患者は別室に隔離するも其他万事小生等は將校同様手厚  
き救護を受け候より今日は己に入院後旬日余に相成候て身神日増



地 理 風 俗 台 灣 情 事

快癒全癒退院の期も近かるべしと存候間一同安神被下度候下略

土 民

土民の住居は何れも石造にまて貧賤不潔なる割合には壯麗の觀あり然れども何れも頑愚にして慈心深く支那人の性質も備へ金錢の爲めにのみ眼を眩ます事彼等の常態と知られたり此に就き面白き談柄あり即ち花田節君の新占領雜記中に掲げられたるものあるが茲に摘載せんに

(上略)彼等は日本の銅貨を好まず銀貨及び白銅貨を好む殊に面白きは十錢銀貨より五錢の白銅貨を愛せるの傾あり若し貨物と購ひ十錢銀貨を興へて喜ばざるの色あるとき之を白銅貨一個を交換せば彼は喜んで之れを受く其愚笑ふに堪へたり然れども貧慾は支那人が先天的特性の一なり余等一日相携へて民家に入り鶏を購ひ食を炊がしめて之を食ふ而して數度に其代を償ふ其高八十余錢に及ぶ

地 理 風 俗 台 灣 情 事

辞去らんとするや彼等頻りに予等が興へたる銀貨を計算せ更に請ふて曰く願はくば一圓に換へられたまふ余輩其無禮を責めて還へる始先日本人の彼を遇するや大に寛み過ぎ物品を購ふも亦過分の代を拂ふ彼等之に狙れ遂に斯般の無禮を働く養ひ難きは支那人あり云々  
と之れを見ても土民の性質は之れを知るに明かり平常は漁業を營み芋落花生等を以て常衣とあま米砂糖菓實及蔬菓等は之れを台灣より仰ぐなり

近 孔 良 水

諸島何れも雨降る事之なく水利常に乏しく漁翁島のみ稍此不便なきを以て頃日海軍省より蒸汽仕掛の蒸溜機を据付け晝夜飲料水の濾過に従事して重に軍艦用に供え其余を支應吏員等に給ふ居れり

奇 刑



地 理 風 俗 台 灣 事 情

土人は概して眼に一丁字おく其頑冥固陋は素より免かれざるも從來自治を以て能く平穩を得たるは清國中蓋し絶へて無かりし所なるべし自治の一斑を舉ぐれば到る處公殿に由りて郷老を置き寺院等に會議して政務を扱ひ取謂法三章的控書の貼札を爲せり中に尤も可笑しきは罪人をして演劇隱玄藝の類(か)をあさし先衆之れを觀覽するを以て極刑となせるの一事なり

墳墓

我忠死軍人の墳墓はセメントを以て一丈四尺角高三丈五尺に造り前面よは

混成枝隊軍人軍属合葬之墓

裏面よは

明治二十八年六月二十日建

どわり両横よは死亡軍人の名を鐫れり埋葬の所は

第一(二百四人)

第二(七十八人)

第三(二百二十八人)

第四(六十八人)

第五(百八十一人)

第六(百八十一人)

第七(四十人)

の土饅頭を築き其傍に山村少尉の墓地あり總ての周圍は土手を以て遶ら玄頗る壯觀たり

守衛

諸島薪材に乏き故寸斷の木片にても土人は争ふて之れを拾ひ去るを常とす鎮定後支廳にて道路を修築橋梁を架するに一夜の中に橋は土人の爲先に奪ひ去られ其架設幾回に及び玄やを知らざる所あるより近來は橋々に守衛を置くことゝなれり又島司は樹木なきことを憂ひ赴任の當時密柑竹赤を携へて之を各處に栽培したるが是亦番兵を附えて奪掠を戒め居れり

地價



地 理 風 俗 台 灣 事 情

諸島には田なく皆畑を以て其廣狹の稱を裁といふ即裁るといふ事に  
て内地の畦を切るが如く見通しを鋤き上るの意も外ならず島司が畑  
地の坪数を定むるに當り取調べをなせしよ土人の言ふ所十二裁より  
二十五裁迄の間其答各々異れり因て之れを折衷し一坪を十二裁以上  
二十二裁以下とし三圓以上八圓以下の地價と定先られたり

◎台湾に於ける一夜話

「台湾に於ける一夜」は合衆國の士官某が近頃自ら知人に語れる  
のにして四月念一日の紐育ヘラルドに記する所なり其事餘り  
可笑しく又奇ありとて毎日新聞に節譯せられんか又以て台湾土  
蕃の風俗事情を知るの一助とあらん記して讀者の一覽も供す  
十數年前余は之を去く台湾を見舞ふとの意志を有て偶々一友人の商業  
上の事故を以て島地に在るを機とし遂に合衆國の商船某號に搭して

地 理 風 俗 台 灣 事 情

淡水港より上陸しき斯くて上陸の日余は直ちに目指す友人を訪ひし  
に生憎や彼れは樟腦買入の爲め更らに奥深く内地へ赴き居ると聞き  
たり失望は如何ありしや四邊を顧みれば皆見ず知すの蠻民なり余は  
何の處に向て余が台湾の東道を覓む可き第一夕陽は已に林樹に含ま  
れて蒼然たる暮色は漸く丘陵の遠近を掩ひたるに余は未だ一夜の宿  
泊を乞ひ得可き家だも有せざるなり余は辛ふて余が案内者を説得  
せし土民中右族とも謂はるる者に一夜の宿泊を與へてまゐることに幹旋  
せまめたり(中略)

台湾の右族が余に與へたる旅館は母屋よりは餘程懸け離れて打建て  
られたる擔低き一の亭子のよう見受けられぬ室内を照らすラムプ  
は簡短なる器よ油を盛りて之に竹片を浸し而て其端に火を點きた  
る迄のものありき光は勿論黯澹たり眼前の光景只だ何と無く怖ろ  
しく感せられぬ初め余を此亭子に導き來りし者は右族の家に召使は



地 理 風 俗 台 灣 事 情

る、一個の女中やがて彼を余に寢臺の所在を知らしめて鄭重に一  
禮を以て再び母屋の方に立去りたり但だ彼が立去る時余を見て一笑  
して其紅の齒(台湾土民は全身に墨黥するの外檳榔樹の實を喰ふを以  
て其齒も亦た深紅色なり)を現はしし時には余が氣味悪さは一層其程  
度を高めぬ

余は此日途中に於て台湾土民の家屋無數を目撃したるも其構造は餘  
りに粗野に於て直ち又台湾全島を擧ぐるも余等が所謂家屋なる者は  
一も有る無きと思惟たり況んや終日の歩行に余が此時頗る疲勞  
乏たるをや余は女中が立去りたる後敢て余に與へられたる旅館の  
構結構様等を檢せんとも爲さず衣服解きあへず寢臺の上を横わりて  
忽ち華胥に遊びたり

如何に長時間余が眠りつゝありしか余は之を知らざされ余が微睡  
は忽ち巨礫の爆裂せるが如き響き驚かされて攪破せられぬ攪破せら

地 理 風 俗 台 灣 事 情

れて震時の程は余は只だ茫然合衆國軍艦の甲板上に在ればこそ不  
時に巨礫の響を聞くも甚だ無理ならざる台湾右族の許に宿して而かも  
人定まり萬籟寂寥たる深夜に此常ならぬ音を耳にするとは頗る奇怪  
と謂はざる可からず果して何事ぞア、余は氣付きたり余は一場の悪  
夢を見しならん若かず速かに精神を鎮靜して再び眠るに、さるに此  
時不可思議なる事は復び始まり余が寢臺のある室内は次第々々に  
明かるく爲りぬ余は以爲へらく是れ全く余が神經のせいなりと乃ち  
雙手を以て余が兩眼を摩謐せ更らに諦視したるに室内の微白なるこ  
とは依然とて前の如くなりしのみならず見る／＼中益々明かる  
く爲りきハテ夜の明けにはマメ間のある筈なり畢竟是れ何等の現  
象ぞと余が此時發したる語ありき而して尙ほ之のみならず余は又  
た最も恐ろしき物を薄暗き壁上而かも余が寢臺に最も接近せる處に  
見出したるあり白一片の物ド、ヤラ其れが觸摸のように見ゆるあり



地 理 風 俗 台 灣 事 情

ドイヤラ 鬮 儀 の よう 又 見 へ 玄 物 は 愈 々 鬮 儀 と 認 め ら る べ し まで 又 室 内  
は 今 や 全 く 明 か る く 爲 り ぬ 而 し て 鬮 儀 は 獨 り 余 が 寢 臺 の 接 近 せ る 壁  
の 上 に 懸 り 居 る の み な ら ず し て 天 井 にも 床 上 にも 是 處 彼 處 に 見 ら れ  
得 る な り 中 には 小 く し て 稍 々 圓 形 を 帯 び 土 民 の 鬮 儀 な る 可 し と 思 は  
る し も わ れ ば 又 大 く し て 稍 々 異 形 を 帯 び 支 那 人 の 鬮 儀 な る 可 し と 思  
は る し も わ り 或 は 尙 ほ 生 々 し く て 處 々 に 肉 塊 を 存 せ 其 上 に 懸 鬆 た る  
鬮 を 留 む る も わ り 或 は 上 下 の 顎 骨 深 く 開 き て 例 の 紅 の 齒 を 現 は せ た  
る も わ り 前 後 左 右 に 點 々 累 々 た る 鬮 儀 は 其 形 狀 固 より 一 様 ち ら ざ る  
も 此 時 此 際 余 が 眼 より 見 れ ば 彼 等 は 皆 な 其 雙 の 空 虚 又 し て 洞 穴 の 如  
き 眼 を 通 じ て 一 齊 に 余 が 顔 上 に 注 視 す る が 如 く わ り き 且 つ 彼 等 は 極  
め て 沈 黙 な り し も 余 が 耳 又 は 頗 る 怖 る 甚 き 聲 を 發 す る か の 如 く 聞 へ  
き 彼 等 は 極 め て 靜 止 し た れ ども 余 が 眼 には 次 第 々 々 に 余 が 身 邊 又 進  
み 來 る か の 如 く 見 へ き 余 は 此 時 再 び 屹 と 坐 是 等 の 現 象 一 又 皆 な 余

地 理 風 俗 台 灣 事 情

が 神 經 の 妄 想 なる 可 也 と 思 返 へ し し も 其 實 を 言 へ ば 全 く 然 な り と  
判 断 し 去 る 程 の 勇 氣 も 不 足 ざ り き ざる に ア ラ 奇 怪 や 此 一 刹 那 余 が 寢  
臺 の 有 る 室 内 は 忽 ち 復 び 最 初 の 黯 澹 に 回 り て 咫 尺 も 朦 朧 と 坐 明 か  
なり 難 く 光 と して は 只 だ 一 片 簡 單 な る 竹 片 に 火 を 點 じ た る も の し 且  
爲 り ぬ 縦 ひ 思 せ ば 幾 個 の 鬮 儀 が 室 内 の 黯 澹 た る 爲 り 見 え ず な  
り 又 は 余 が 嬉 し げ 思 へ ば 所 なる も せ ば 此 乍 に 坐 明 か る く 爲 り 又  
た 乍 に 坐 暗 くら く 爲 る こと は さら ぬ だ に 驚 怖 交 々 至 り て 禁 ず 可 可 可  
ざる 余 を し て 更 ら に 一 層 の 氣 味 惡 さ を 添 へ 坐 遂 一 刻 も 室 内 に 止  
る 能 は ず と 決 心 せ し む る に 至 れ り 況 ん や 今 度 室 内 が 復 び 明 か る く 爲  
り し 時 には 又 だ 最 初 の 巨 礫 の 爆 烈 す る が 如 き 響 は 數 回 余 が 耳 を 穿 ち  
し を や 而 し て 又 だ 況 ん や 偶 々 窓 の 罅 隙 を 縫 へ て 夜 風 の 吹 き 入 る 又 連  
れて 天 井 の 中 央 より 細 き 辮 鬮 の 紐 も 吊 せ し 鬮 儀 の 數 個 が 相 觸 れ て  
一 種 言 へ ば 言 は れ ぬ 凄 味 有 る 音 を 發 せ る を や 余 は 到 底 最 早 や 是 等 の



地 理 風 俗 台 灣 事 情

場所には獨臥去能はずと思惟去覺るす一聲の叫を殘て室の入口より  
りまか將た窓ありまか今は定かに之を記憶せざれども兎に角速ま  
身を跳らせて外に出でたり  
如何急しく如何多くの里程を歩みしや余は之を知らずされど余  
が不意に余が初先に訪ふて遇はざりま友人に陰々たる樟腦林の畔  
邂逅したるを思へば余は少くとも怖さに打たれたる爲めに七八哩は  
夢中に走りまある可し(中略)  
友人笑て余の言ひけらく台灣の土民は鬪闘を多く有するを以て唯一  
の最大名譽と爲す彼等に「鬪闘室」あるものあり彼等が青年軍人を優待  
する最上乘の室にして其四壁より窓戸天井悉皆鬪闘を以て飾と爲さ  
るる無え是れ蓋て彼等が一人たりとも多く人を殺すを以て其武勇と  
爲す所以にして千百限無き鬪闘を誇て他人に示すは大に其威名を街  
ふ運なり聞く彼等は其屠戮したる人の鬪闘を保存するのみ止らず

地 理 風 俗 台 灣 事 情

して其家族中死亡したるもの鬪闘も亦た之を十襲して保存するど  
かや彼等今君を此鬪闘室に宿せま蓋て彼等に在りては君が軍人た  
ることを知りて頗る君を優待したるなり若ま夫れ室内の乍ち明かる  
く又た乍ち暗く爲りまに至りては元來台灣には無数の火山ありて偶  
々其一が今宵破裂して激ま火を噴くこと數次なりまに因るのみ余  
は現ま先きに其由を他より聽きたり巨礫の爆裂せしが如き響も亦た  
是れに外あらざるのみと  
余は語を聞きて餘り馬鹿々々しさに笑ひもせざりまア、余は實に笑  
ひもせざりまざるにても台灣の習俗は如何に奇にして且妙なるよ！

◎ 台灣衛生談

台灣は我版圖に歸えて事業亦一新せん然れども内地の人民未だ季候  
に慣れず爲めに衛生を重んぜざる可からず今醫學士高木友枝氏が毎



地 理 風 俗 台 灣 事 情

日新聞社員に語る所なりといふを聞くに曰く台湾は元來健康なる土地  
地又あらず之を拓殖するものは須く衛生上の施設を先にすべし上水  
を設け下水を穿ち道路を修繕するにあらざるよりは台湾は長く煙  
瘴霧に鎖されてホルモサ(美島)の實を顯さざるべく移住者は終歲キニ  
一テに頼りて僅に台湾熱の侵襲を防ぐに止るべし焉んぞ事業の發達  
を企畫すべけんや斯の如く必要ある衛生事務は今や民政局の一部に  
踴躍するものゝ如し予を以て之れを見れば民政陸海軍諸局と同一權  
力を有する衛生局を設け才學兼備の醫士を以て之が長官となし大に  
衛生行政の擴張を計らざるべからん云々又曰く台湾人の阿片吸用を  
嚴禁せんとするは野暴の骨頂なり日本人は兎角律義あるが故に表面  
的觀察に鋭くして裏面の觀察を忘るゝ事あり如何程入港船の取締を  
嚴重にするも彼等は一葦帶水を隔つる福州より支那船の便に依りて  
全島周圍到處密輸を得べし容易に取締の出來得るものゝ非ず彼

地 理 風 俗 台 灣 事 情

の周到嚴密なる取締法規の下に數日に一回位しか入港せざる大汽船  
すら横濱神戸諸港に在留する支那人に不足なき禁制物を給するにあ  
らずや然るゝ往々世の政治家は阿片を禁すれば即支那人が情慾に驅  
られて其土地を去るべしと思ふものあらんやれども個は大なる謬見  
なり米國の如き支那人を疾惡し法令を設けて之れを驅逐せんとする  
國にさへ支那人は日々益々増殖するの勢あり彼れ等の執念深き性分  
阿片禁制位に僻易して遠く住み慣れ去る如き事如何ぞ之れ  
あるべき況んや前述の如く到底阿片禁制の行はれざる事情あるに於  
てをや難髪も亦然かなり彼れ等が幼少より寵愛を畜へたる頭髪を  
一刹那も切斷するがごとき無慈悲の事をなすものに非ず要は彼等の  
惡習を邦人に傳へせむざるにありのみ余は昨年香港に渡航し英國人  
が支那人を御するの大膽なるに驚けり英の警察官は英人及他國人の  
失態あるれば一步を假借せず忽ち之れを制すと雖も支那人が如何



地 理 風 俗 台 灣 事 情

程醜体を顯はすも聊か之れに頓着する所なし詰り英人は支那人を見  
ると犬の如く又猫の如く人間の待遇を施さるに似たり是れ蓋し英  
國は多年異種の國人を支配し經驗上より得たる知識の結果なるべし  
余が友某曾て印度又遊びたる時監獄を參觀せるに料理の事に從事し  
つゝありて印度囚人忽ち多量の食物原料を藎芥中に投棄せり某驚て  
其故を問へば看守ある英人は微笑云ながら貴下の身躰食物に影せ  
が爲なり印度人は外國人の影食物を一過せば之れを食えたるもの災  
難又逢ふと信せりと答へ敢て囚人を叱咤する事もなかり云ふ亦  
以て英人が蠻人を遇するに無頓着を以てするの一斑を窺ふべし左  
れも英人豈蠻人を寛待するものからんや苟も利害の關する所あれば  
彼れ等を壓伏する事に躊躇せず故に若し兩國人互ひ喧嘩するあれ  
ば英の警官は理を枉げて英人を勝利に歸せしむと云ふ今や吾政府當  
路者の意見は新占領地に阿片の輸入を禁ぜ難き切り去らぬ即ち

地 理 風 俗 台 灣 事 情

彼れ蠻人をして日本化せえたる一視同仁の政を布とするが如き傾向  
有とせんか开は所謂邦人の潔癖又て甚だ得策ならずと信す一方に  
於ては純粹に雜居制を取り他方に於ては阿片の密輸を制する能はざる  
様にては害毒蓋し少からざらん鄙見又據れば衣食住其他の習慣を  
可成的保存せえぬ之を遇するに劣等の人種を以てし本邦の移住者を  
して彼等を嫉惡するの觀念を生せしむべし之と同時に辯髪を斷ち阿  
片を嗜まざる者は本邦人と同一の待遇をなすべし然る時は自然の成  
り行として日本街支那街の分立を見るべし夫の新網町萬年町を見ず  
や紳士住すべからずとの府令なしと雖も紳士の住むを潔とせざる  
ものは下等人類の住地なればあり阿片の毒を邦人に傳へざらしめん  
よは此筆法に據るを得策なりとす一視同仁の政策は偶々邦人を支那  
化するの弊害に陥るおきを保せず元來吾國人は寧ろ感化易き性質  
ありて質朴なる田舎漢が江戸に半年も住居せば忽ち都門浮華の人と



地 理 風 俗 台 灣 事 情

化し江戸人田舎に行けば忽ち江戸ツ子の氣象を殺がるゝかんどは最も手近き例にまて古への漢學者は自ら東夷と稱し今日の洋學者は皆々乎とまて洋人の風采を摸倣せんことを勉むる如き類例枚舉に違わらず是れに反して支那人は頑硬變せず自尊の氣象あり吾國下等の勞働者かんとは支那化するものおしとは決して云ふべからず例を以て之れを云へば英人は容易に殖民地征服の風を變化せざるも佛人蘭人等は随分殖民地の風に化えたるものありて成迹餘りに善からざりしは人の知るどころなり世には人の溺るゝを救んとして己れ先づ溺るゝものあり到底之を救ふの力なくば己れ溺れざる工夫を廻らそこと智者の事と云ふべと語れり

◎ 實 業 家 の 台 灣

台灣は馬關條約により我版圖となれり同島の匪徒平定後は實業家の

地 理 風 俗 台 灣 事 情

台灣とやらん思ふも同島の重なる産物は砂糖樟腦鐵物の類なり是等の産物は今後我れの一手に引き受け我商人の獨占事業となさる可からず従來の台灣は支那人の台灣にあらすして鴻益の事業は獨り歐人の占むる所たりと云ふも過言にあらざるなり今砂糖製造業に就て言はんか同島の砂糖十中の七八は對岸なる香港地方に運搬し歐人の手によりて製糖せられ我國に輸入する赤白の両砂糖も亦香港より輸送せらるゝか試みに香港より我れへ輸入する砂糖の一ケ年に於る金額如何を見るに白砂糖七百八十九万七千五百三十一圓赤砂糖二十一萬八千八百四十七圓にまて統計八百萬圓餘の多額あり之に加ふるに支那より輸入せらるゝ赤砂糖一ケ年の金額は二百九十五萬千三百八十四圓あるを知る尤も香港を輸入する砂糖の原料は悉く台灣より得るゝ非ずと雖も兎も角我國人が外國より輸入を仰ぐ砂糖の金額は一千萬圓以上の多額あるは明瞭なる事實なり然らば我商人にして



地 理 風 俗 台 灣 事 情

台湾の砂糖を製造する事益々多ければ豈外國より輸入を仰ぐの必要を見んや昨は外國より輸入を仰ぎしもの今は我より輸出せるの位置に變せざるべからず若し砂糖製造の業たる台湾の如き地方にては土地氣候の爲に充分の精製を見る能はざれば之を我國へ運搬し内地の製造所にて製するも可あり尙進んでは上海の如き地方に於て砂糖製造所を設立せざるに支那より輸入を仰ぎしもの轉じて支那へ輸出する計畫を爲さざる可からざるや勿論なり歐人は利を見て機に投するに敏速なり左れば台湾島にして我日本の領とある我商人たるもの又大に砂糖製造業の前途を慮らざる可からざるなり次は樟腦製造業なり台湾の樟腦産出額の多き事今更言ふ迄もあき事なるが今後我商人の大に心得べき事は全製造所設立地の事あり台湾の如き熱き地方にては或は十分ある結果を見る事能はざることあらん若し然りとされば製造所は我内地に設立するより支那の各港灣に於て製造所を

地 理 風 俗 台 灣 事 情

設立せざる可からず我國へ運搬して製造するも敢て不可なきが如きも支那の各開港場便宜の地に設置するも若かざるあり獨り樟腦の製造業に限らず台湾の氣候土地に適合せる製造品は之を對岸なる上海の如き地方へ運搬して以て製造に着手するは利家の關係大なり又製造業に限らず支那と貿易の目的とする物品は悉く支那の内地に大會社を設けし支那内地は殆んど我國内の如く心得將來の計畫を爲さる可らずと商業會議所員は説けり

台湾の樟腦製造法

樟樹より樟腦を採取する方法は我國と台湾と何れも大抵同一にて樟の幹枝根株をば鋏を以て削りて木片と爲之れを蒸溜器にて製造するものにて樟樹一本の周圍凡そ五尺のものより樟腦は八九十斤を製すべし其方法は木片百九十斤程を甑に詰め一斗二升入位の荷ひ桶にて水七杯程を圍み其際竈に薪木を十分強く焚き沸騰して箱先穴より達



地理風俗台灣事情

地理風俗 台灣事情畢

百十六  
する加減を見て焚止然る後其の熾の上より蒸粕の木片を詰込み燻らしめ翌朝に至るまで火の保つ様に注意えて竈の口を切石にて塞ぎ翌朝に至り荷ひ桶にて二杯の水を入れ薪木を強く焚き木片を詰込み口を塞ぐこと前夜の如くし而して正午時分に荷を桶に二杯の水を入れ翌夜に至り即ち一晝夜蒸えたる木片を甑の下口を明けて悉皆掻き出し甑の上口より新しき木片を詰替へ水を入れ竈を焚く等總べて前夜の如く五晝夜目の夜箱を明け離れ附着えたる樟腦と油とを採取し桶に收む尤も下箱の水に浮びたる腦と油とを汲取り分離せしむる者なりと云ふ

明治廿八年十月九日印刷  
同 年十月十四日發行

版權所有

編輯者 天野馨  
東京市神田區柳原河岸第拾四號地

發行者 瀨山佐吉  
東京市淺草區黑船町十五番地

印刷者 龍雲堂大場沃美  
東京市神田區柳原河岸第拾四號地  
(舊十一號地)

發行所 大川屋  
東京市淺草區三好町七番地

發行所 山口屋  
東京市日本橋區馬喰町







流行曲せうきょく 攘討せうたう 支那しな 漢もの

日清の戦争に關しては人心の激發する處となり敵愾心は凝つて諸事  
百般の上に顯はる本書は古來より當代に至るまでの流行音曲中粹を  
抜き華を摘みて之を改作す所謂かへうたどまて面白可笑ま或は敵  
を嘲弄するあり或は勇武の功績を賞賛するあり一句一章糸又合せて  
唄ひ來れば勇氣勃々と起り和氣洋洋々として樂む而して當時世上  
に出版されず書籍中此の書の上に出ずるものなきは諸士購讀の上之  
れを知れ

新三遊亭しんさんゆうてい 落しし 噺ばなし

人の頤をばづして云ふ言はれぬ面白味あるは三遊亭の落し噺とそ  
本書は三遊派中の最も名人と稱せられたる圓朝子を始めとして圓遊  
圓喬等數十名各特意の噺を演ず鹿爪らしきお方も眞自目の伶人も吹  
き出さぬ様は用心あつて一本を購ひ玉へ

東京淺草區黒船町十五番地

順成堂瀨山敬白







2015-2016  
Annual Report  
of the  
Board of Directors  
of the  
City of  
New York



特 20

283

地理 台湾事情  
風俗

国立国会図書館

026603-000-6

特20-283

台湾事情

天野 馨 / 編

M28

ADD-0285

